ハイスクールＤ×Ｄ　～赤龍帝の幼馴染は転生者～

ジント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ　～赤龍帝の幼馴染は転生者～

【Ｎコード】
Ｎ８１６８Ｘ

【作者名】
ジント

【あらすじ】
神のミスで死んでしまった少年はハイスクールＤ×Ｄの世界に転生する事になる。元からチート気味な少年の存在によって物語はどう変わっていくのか、それはまだ誰も分からない。

最近はまったハイスクールＤ×Ｄの二次小説です。
更新不定期ですがよろしくお願いします。
※自分のもう一つの作品と繋がりがありますが基本出てこないと思います。

プロローグ（前書き）

最近はまった小説と久々にプレイしたゲームをやっていたら唐突に思いつきました。
駄文になりますがどうぞご覧ください。

プロローグ

薊屋狼土（あざみやろうど）――俺の名前だな。

皆は俺の事を「ロウ、ロウ」と呼んでいる。

結構、いや、かなり有名な名門私立高校の三年生だ。

見知らぬ生徒に「あの人ってロウさんじゃない？」と言われたことがあるが、どんだけ名前が知られているのかは分からない。

意外と人気者？

断じて否だ。

何せ、俺はこの学校でただ一人の不良だ。

男子からは毛虫の如く嫌われている。

その代わりに女子からは結構人気があるんだがな。

自分で言うのもなんだが、イケメンだし、成績はトップだし、こないだの全国模試も十位内に入ってたし、この学校じゃ知らぬ者はいない有名人だろう。

不良でイケメンで成績優秀・・・・・どこの漫画のキャラだって話だ。

そして未だに進路がはっきりとしていないから先生方にとっても悩

みの種だしな。

特に夢もない俺はこれからの人生をどう過ごすか日々悩みながら過ごしていたがある日転機が訪れた。

「だ、誰か助けてぇぇぇぇ！」

包丁を持った男が女の子に襲いかかっていた。

俺は一瞬で間合いを詰め男の顔を殴る。

男が崩れ落ちたのを見て女の子は泣きながら俺に礼を言ってくれた。

なんだかこそばゆいというか恥ずかしいというかそんな感情が俺に流れる。

感謝されるとかあんまし経験が無かったからか？

そんな感傷に浸っていたからか、俺は男が起き上がって包丁を刺してくる事に気づかなかった。

背中に激痛が走る。

滅茶苦茶痛え！

振り向きざまに一撃お見舞いして今度こそ意識を飛ばしたが刺された場所から血が止まらない。

どうやら急所を刺されたらしい。

・・・・俺、死ぬのか？

そんな事を思いながら俺は倒れた。

あ～ここで死ぬのか俺。

何か走馬灯も見えるしマジで死ぬっぽい。

父さん母さん今まで迷惑かけてごめん。

数少ない友人や喧嘩友達共、先に逝くわ。

願わくばベッドの下のエロ本が見つからないように。

そして・・・・童貞捨てられなかったぜこんちくしょう・・・・！

視界がどんどん暗くなっていく。

意識が途切れる前に見たのは女の子の泣き顔とよく晴れた青空だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「そんな訳で少年、君の命は終わってしまったが生き返れるとしたらどうする？」

俺が死んだときの様子を見せつけて、目の前の自称“神”はそんな事を言いやがった。

生き返れる・・・・だと！？

「・・・・本当か？」

正直に言うなら生き返りたい。

俺はまだ、人生ってのを楽しみたいしやれる事も見つけたい。

だけど、いくらなんでも都合が良すぎだってんだよ。

「疑うのも当然だろう。しかしこれにはちゃんとした理由がある。君が本来死ぬのは七十年後の筈だった。あの時君が死んだのはまさしくイレギュラーなのだよ。この場合こちらのミスでもあるしせめてもの詫びとして力や特典を与えて転生の機会を与えるのが最近の決まりとなっている」

・・・・何というか、

「神でもミスなんてするんだな」

意外な事実に怒りが萎えちまった。

「・・・・大抵この話をしたら怒鳴るか殴りかかってくるかなんだけどね」

そんな変なものを見たような目はやめろおおおおおおおおお！　と、叫びたいのを我慢しつつ俺はクールに、そう、クールに答えようとする。

「いやいや、とても怒ってますよこの〇〇野郎。でも神に挑むなんて馬鹿な真似する気はないですし、大人らしい会話をすべきだと思ってるんですよこの××が！」

完璧だ！

感情を完全に押し殺した見事な言葉だったぜ！

「・・・君って頭がいい馬鹿なんだね。そういうのは大好きだよ」

その言葉を聞いた瞬間に背筋が凍った。

「やめろ近づくなあっちいけこっち向くな俺にそんな趣味はねえおホモ達になんかなるか」

「ひ、ひどいな君。というか大人の対応はどうしたんだい？」

そんなもん捨てるしかないだろこのＢＬ野郎が！

「ゴ、ゴホン。とりあえず転生に関する詳しい事なんだけど能力とか特典は僕の場合二つ与えられる。そして重要なのは悪意をもって原作ブレイクしようとしちゃあ駄目だよ。転生者狩りが来て最悪の場合能力と記憶を消されるからね」

「ちょっと待てよ。原作って何？どっかの漫画の世界にでも飛ばす気かよ！？」

俺まだ転生するかどうかも言ってないぞ。

「君は絶対転生する気だろう？　これでも神なんだから君の考えく

らい分かるし、何より、君はただただ平穏な世界に行きたいだなんて欠片も思っちゃいないっていうのも分かる。これは僕の自分勝手な意見だけど君はどこかの作品の世界に行くべきだ。君のその才能は、その気質は、君が元いた世界みたいな所じゃあ合わない。断言しよう。君は今まで僕が担当した人間のなかでも最も才能に溢れ、最も刺激を求め、そして最も優しい男だよ」

・・・・なんか、褒められまくったんだが、は、恥ずかしい。

でも、たしかにこいつの言う通りだ。

ただただ平凡に生きるのは俺の性に合ってないとずっと思っていた。

俺は、ひょっとしたらこの時を待っていたのかもしれない。

自分の人生を変えるような切欠を。

「決まったようだね？」

ああ、決まっちまったよ。

「俺は、転生したい！　もう一度生を得て人生を楽しみたい！！」

「よろしい！　ならば転生だ！！」

こうしてこの俺、薊屋狼土の転生が決まった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「これで本当にいいのかい？」

さっきから何度も確認してくる神に対し俺は同じ答えを繰り返す。

「転生する世界は俺の知らない世界。能力はその世界のもの。原作に関われる立場。これのどこに駄目な所がある？」

「いや、こんな風に転生する人なんて珍しいから驚いちゃって」

まあ、確かにそうだろうな、こんな選択する奴。

「容姿や性別、そして名前は転生前と変わらない・・・・って別にいいのか」

はっ、そりゃあイケメンですから。

ＴＳする気もないしこれでいい。

名前も今のが気に入っている。

「まあこれなら悪意を持った原作ブレイクなんて出来るわけないし良いのかもね」

「・・・・そんなにやばいのか、その、転生者狩りってのは？」

何度もしつこく言ってるから気になるじゃねえか。

転生者を狩る存在・・・・死神っぽい奴が頭に浮かぶ。

「ゼウス様が直接スカウトした男でね、生身の状態で銃弾避けたり転生者と殴り合いで勝ったりと化け物としか言いようがないらしい」

頭の中の死神のイメージがゴリラみたいな筋肉ムキムキの巨漢に早変わりした。

何だよその化け物、絶対に会いたくねえ。

「大丈夫大丈夫、君なら会う事なんて無いって。それじゃあ、転生を始めようか」

そう言うと俺の足元に魔方陣的なものが現れる。

何だ？　転移とかそんな感じなのか？

「向こうに着いたらアフターサービスでその世界についてほんのちょっとだけ教えてあげるよ。それじゃあ、行ってらっしゃ～い」

その瞬間、

俺は空中に打ち上げられた。

「ぬおおおおおおおおおおおおおぉおおおおおおぉおおおおおおおおぉおおおおおおぉおお！！！！」

じ、　Ｇが、　凄まじいＧで押しつぶされるうううううううううううううううううううううう！！

なんで打ち上げるんだよ！？
普通は穴に落ちるとかじゃないのか？
『それってテンプレだから変えてみちゃった♪』
余計な事してんじゃねえええええええ！！
心の中で叫びながら俺の意識は途切れた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「さーて、ロウ君の行った世界は何処かな？」
一人になった神は狼土の転生した世界を確認する。
「ほう、この世界か。んで能力は・・・・・ってこれはまた面白いものになったなあ。まさに彼にピッタリなものじゃないか。こういう運の強さも彼の才能なんだろうな」
そう呟きながら彼が飛んで行った上空を見上げる。
「『ハイスクールD×D』の世界、君はどんな物語を紡ぐのかなロウ君？」

プロローグ2

意識が覚醒した時俺は揺り籠の中にいた。

体を動かそうとするが上手く動かない。

そういや赤ん坊からのスタートなんだよな。

そうこうしているうちに両親らしき人たちが来た。

・・・・あれ？

「あなた、狼土が起きてるわ」

「ああ。でも泣かないなんて根性のある子だなぁ」

「もう！　赤ん坊に根性なんてある訳ないでしょう！」

両親が何やら言っているが俺の耳には届いていない。

何故かって？

「お・・・・おぎゃあああああああああああ！？（何で・・・・父さんと母さんがここにいるんだよおおおおおおおおおおお！？）」

そう、目の前にいるのは考古学者をやっていた俺の両親、薊屋志狼と薊屋楓その人だった。

「あ、あら？　どうしたの狼土？　お漏らしでもした？」

「いや、お腹がすいてるんじゃないか？」

どういうこった？

まさか過去に戻っただけとかそんなオチか！？

『それについて説明しよう！』

「おぎゃ！？（うおっ！？）」

考えている最中に頭のなかに神の声が響いてきた。

いきなりすぎるぞオイ。

『気にしない気にしない。では今君の目の前にいる二人だが、この世界の君の両親、つまりは平行世界の住人、限りなく似た別人だよ」

あ～なるほど、理解した。

それで、この世界はどんな世界なんだよ？

出来るだけ簡潔に頼む。

『一言で表すならおっぱいだね！』

・・・・ふざけてるのか？

『いやいや、ふざけてなんかないよ！　この世界、というか物語にとっては重要な役割を担っているから！』

それにしてもおっぱいはないだろ！

ひょっとしてエロゲの世界？

『違う違う。ラノベの世界だよ。結構、というかかなり物騒な世界だから君の才能を生かせる事間違いなし！　ちなみに主人公の名前は“兵藤一誠”、タイトルは“ハイスクールＤ×Ｄ”だよ」

主人公の事はともかく、タイトルからして高校から始まるのか？

何せハイスクール、つまりは高校だし。

『そうだよ。高校二年生の春頃から開始だね。それまでのんびりと過ごしてるといい・・・・と、言いたい所だけど下手したら原作開始前に襲われる可能性があるから気をつけてね」

はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？

何言ってんだアンタ！？　説明を求める！

『それはその時になったら分かるよ。それじゃあね』

そう言って一方的に会話を打ち切られた。

それじゃあね、じゃねえよ！

あああああクソッ、仕方ねえな。

とりあえず動けるようになったら体を鍛えるか。

たぶん、襲われるっていうのは能力に関することでだろう。

自分の力についてはさっぱりだが、少なくとも身体能力は高い方がいい。

それに武器も調達する必要があるかもしれない。

出来れば銃がいいな。

手に入れられるかは分からないが。

まあ、

「ほ～ら狼土、おっぱいの時間ですよ～」

今の所の最優先事項はどうやってこの羞恥プレイを乗り切るかだがな。

――――――――――――――――――――

あれから七年が経った。

あの時の事はもう思い出したくない。

この世界は表向きは前世とほとんど変わらなかった。

しかし微妙に違うところもある。

総理大臣の名前や地名。

そしてドラゴンボールならぬドラグ・ソボール。

・・・・まあ、別に困ったことはないし気にしてもいない。

そんな訳で今の俺は小学校二年生。

放課後になり隣の教室にいる幼馴染のイッセーに会いに行った。

イッセー、そう、この世界の主人公らしい兵藤一誠は俺の家の正面に住んでいた。

同い年という事で小さい頃から一緒に遊んでいる仲で、俺にとってはこの世界で出来た初めての友達だ。

しかし、あいつが本当に主人公なのかちょっと疑問に思ってきた。頭が悪い以外は何処にでもいるような普通の男の子にしか見えないのだが。

しかし、それを言えば俺もそうだし。

そんな風に悩みながら教室の扉を開ける。

「イッセー、居るか？」

教室の中を見渡すがイッセーはいなかった。

「薊屋君、兵藤君なら先に帰っちゃったよ。大体五分くらい前かなあ」

教室のいた女の子がそう俺に告げる。

やっぱりか。

最近、何故かは知らないがイッセーは俺より先に帰る機会が多くなってきた。

そのくせ帰るのは俺より遅いときた。

絶対に何かある。

教えてくれた女の子にお礼を言い、俺はイッセーを探し出す事にした。

ったく、一体何処で油売ってんのか？

――――――――――――――――――――

とりあえず帰り道の方にいた人たちから目撃情報を集めた結果、少し離れた所にある公園に向かったのが分かった。

早速公園に行くとすぐにイッセーは見つかった。

「おいイッセー、お前こんな所で何してんだよ？」

「あ、ロウじゃん。お前も何でいるんだよ？」

何でって・・・・・

「最近お前の様子が変だから心配して探したんだよ」

「そっか・・・・ごめんな。でも俺、どうしても見たかったんだ」

「？　何をだよ？」

「あっ、そろそろ始まる、ロウも来いよ！」

そう言ってイッセーは駆け出して行った。

あわててついて行くと中年の男がいた。

傍には小さい荷台が置いてある。

周りには俺達以外誰も居ないようだった。

「おや？　初めて見る子だね。　坊やのお友達かい？」

「うん。俺の親友のロウっていうんだ。ロウ、紹介するぞ。紙芝居屋のおっちゃんだ」

「え、え～と、どうも初めまして・・・・」

いきなりの事に投げやりな挨拶になってしまったがまあいいだろう。

それにしても紙芝居屋か・・・・前世も含めて初めて見たな。

でもイッセーが紙芝居好きだったなんて初めて知った。

漫画以外の本は読まないくせにこういうのは見るんだな。

そんな事を思いつつイッセーがお菓子を買って座り込むのを見て、俺もイッセーの隣に座る事にした。

チリンチリンとおっちゃんがベルを鳴らして紙芝居が始まる。

「昔々、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいたそうな。ある日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川に洗濯をしに行きました」

この流れからして桃太郎か。

紙芝居としてはありきたりだが・・・・何でイッセーはここまで期待に満ちた目をしてるんだ？

いくらこいつでも桃太郎くらいは知ってるはずだが。

「おばあさんが川へ洗濯していると川の上流から――――――おっぱいが流れてきたのです」

・・・・・・・・・・・・る？

おかしい。俺の目と耳に異常が起きたのか？

俺の目に映っているのは無駄にリアルタッチな乳の絵で、俺の耳に入ったのはおっぱいという単語だった。

不味いな、早く病院に行った方がいいかもしれない・・・・

まったく、どうかしてるのか俺は？

こんな昼間に子供にこんなものを見せる紙芝居屋なんている訳ないのに。

「どんぶらこ、ばいんばいん。どんぶらこ、ばいんばいん。どう見てもGカップ以上の爆乳です。張といい、形といい、極上の乳でした」

・・・・いい加減現実逃避はやめるか。

「イッセー、今すぐ帰るぞ。ここにいたらダメ人間になる」

このおっちゃんは紙芝居屋なんかじゃない。

只の変態だ！

俺はイッセーの手を引いて帰ろうとした。

しかし、イッセーは踏ん張って動こうとしない。

「何やってんだイッセー！？」

「やだ！　何で帰らなくちゃいけないんだよ！？　ロウはこの絵を見て何も思わないのか？　俺、こんな乳をもみたいってすごく思ってるぞ！」

お前何言ってんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

おかしい、こんな小学二年生いるはずがないッ！

そんな年でおっぱい揉むとか何で考えられるんだよ！

「いいからお前も最後まで見ろよ。ほら、おっぱいプリン半分やるから」

「いらんわ！」

そんなやりとりをしつつも紙芝居は進んで行く。

おっぱいによって退治された鬼。おっぱいによって幸せになったジジイ。おっぱいによって天罰を受けた若者。おっぱいを掘り起こした犬。

イッセーは目を輝かせているが俺のテンションはどんどん下がっていった。

よく誰も通報しないな、とか、少なくとも実刑は免れないだろうなあ、とかを考えているうちに紙芝居が終わる。

「おっちゃんもおっぱいもんだの？」

イッセーの問いにおっちゃんは微笑んで、

「ああ、もんだよ。たくさんもんだ。だけどな、坊やたち。おっぱいはもむだけでじゃない。――――――――吸えるんだ」

おい、おっちゃん。俺を含めるんじゃない！

てか、なんて事言ってるんだ！？

「坊やたちはまだ子供だからわからないだろうけど、もう少し大きくなったらわかる。――――――吸いたい衝動ってものが。大人の男はその衝動と日々戦いながら今日も生きてるんだ」

それは一部の大人だけだ！　とか、カッコつけて言ってるんじゃない！　とか言いたいのをぐっと堪えてイッセーを見る。

・・・・なにやら目が最高にキラキラしてるんですけど！？

「いいかい、坊やたち。こう吸うんだ」

おっちゃんがおっぱいプリンの先端を勢いよく吸って、一瞬で口の中に消えた。

「す、すっげぇ！」

いや、全然すごくないぞ！

そんなイッセーにおっぱいプリンを渡したおっちゃんは「おうちで練習してごらん」と、ふざけた事を言って帰っていった。

「なあ、ロウ。俺もおっちゃんみたいに吸えるかなぁ？」

「吸えなくていい、つーか吸えるようになるんじゃない！」

――――――――――――――――――――

あれから数ヶ月経った。

イッセーは未だにおっちゃんの元に通い続けている。

家族に隠れてまでおっぱいプリンを吸う特訓をしているのを見たらもはや何も言えなくなってしまった。

そんな夏のある日、イッセーが新作の日だから一緒に行こう、と言い出した。

普段なら却下する所だが、何故かこの日に限ってついていく気になり、自転車に乗って公園に向かう。

そして公園で俺たちが見たのは、

「ほら、行くぞ。まったく、こんな真っ昼間からこんなものを子供に見せるなんて」

警察に連行されていくおっちゃんだった。

あ～あ。とうとう捕まったか。

そんな風に俺は冷静に受け止めていたがイッセーは違った。

おっちゃんに駆け寄って行くが、もう一人の警察官に抑えられる。

「おっちゃん！　おっちゃん！　どうして！　どうして！」

「あ～もう！　落ち着けイッセー！」

あまりおまわりさんに迷惑をかけるわけにはいかないため、後ろからイッセーを羽交い絞めにして動きを封じる。

クソッ、暴れるなこら！

「離せよロウ！　おっちゃんは悪くないんだ！　おっちゃんは俺におっぱいを教えてくれたんだ！　おっちゃん！　おっちゃん！　おっぱい！　おっぱい！」

「お前言ってて恥ずかしくないのか！？」

この歳で思考が思春期の中学生を飛び越えてる！

こいつの将来が本格的に不安になってきたぞおい。

「いいか、よく聞けよイッセー。お前から見ればおっちゃんはおっぱいを教えてくれた先生なんだろうが、世間一般、そして俺から見

ればただの変態にしか見えないんだ！」

「知るか！　おっちゃんは悪くない！　おっちゃんは、おっちゃんは――――エロかっただけなんだ」

「それを変態と言うんだ！」

ああ、神様よ、あんたが何でこの世界をおっぱいって言葉で表したのか少し分かった気がするよ。

小学二年生でこれなんだ。

高校生の時はどうなってるのか正直見当もつかん。

そんな時におっちゃんは俺たちに微笑み、こう言った。

「坊やたち、いつかおっぱいをもんで、そして吸え」

それが、おっちゃんの最後の言葉だった。

――――最後まであんたは変態だったな！

国家権力によって連れられていくおっちゃんを見ながらそう思った。

果たして、あの人の影響を受けた人間がイッセー以外に何人いたのやら？

「・・・・おっちゃんの新作、どんなのだったんだろう？」

イッセーが悔しそうで、そして泣きそうな顔でそう呟く。

何か、大切なものを失ったような感じだった。
それほどおっちゃんが大切だったのか・・・・・。
・・・・クソッ！　そんな顔してんじゃねえよ。
こっちの気分まで下がるじゃねえか。
「元気出せよイッセー、きっと、いつかまた会えるさ」
「・・・・本当に？」
「お前がおっちゃんの事を忘れないならな」
正直に言って俺は二度と会いたくないが。
しかし、その言葉を聞いてイッセーは少し元気が出たようだ。
「そうだよな。またいつか会える・・・・よし、家に帰っておっぱいプリンを吸う練習をするぞ！　いつか、おっぱいを吸う時のために！」
・・・・励ますべきじゃなかったかも。
こうして夏のある日、イッセーにとって先生と言うべき存在は姿を消した。
そして、彼と再会したのは十年後のとある公園でだった。

その時俺が抱いた感情は非常に複雑で、ある意味俺たちの恩人とでも言うべき存在になったおっちゃんに感謝すべきなのか、恨むべきなのかかなり迷う事となった。

主人公設定（転生前）

名前：薊屋（あざみや）　狼士（ろうど）

容姿端麗であらゆる事を高レベルでこなせる天才。刺激を求めて色々な事に首を突っ込むうちに不良として周りから認識されるようになった。実際にタバコを吸ったりもしていたので本人もそれを認めている。
そのため学校では浮いていたが女子の間ではファンクラブが出来るほど人気があった。
ある日襲われていた女の子を助けて死亡し、それがミスであると分かり転生する事となる。

性格は一見クールで周りからは冷淡な男だと思われているが、実際は非常に優しく困っている人を見ると放っておけなかったり、親しい者のためなら身を挺してでも助けようとするなどの情の深さも持ち合わせる。しかし日常に退屈している面があり、常に刺激を求め面白そうな事なら基本何でもする。
また、結構スケベな所があり、女性には興味深々でエロ本を大量にベッドの下に隠している。
基本的には常識人なのでツッコミをよくするが神曰く、頭のいい馬鹿であり、たまにとんでもない行動、発言をする。

Ｌｉｆｅ．１　物語、始まりました。（前書き）

キャラ崩壊してるかもしれませんがどうぞ。

Ｌｉｆｅ．１　物語、始まりました。

勝てないからって、戦わない理由にはなんねえよ。

――――――――――――――――――――

『オキナサイ！　オキナサイ！　オ、オキナイナラ、キ、キス、スルワヨ・・・・』

「・・・・んあ」

ツンデレ声の目覚ましによって床で寝ていた俺は目を覚ました。

本来はこの部屋の主を寝床から起こすのが役割なのだが、その主はベッドの上でいびきをかきながら寝続けていた。

俺はおぼつかない足取りで部屋の主――――イッセーの前まで来ると

「いつまで寝てんだ。とっとと起きろ！」

あらかじめ用意してあったハリセンをイッセーの頭に振り下ろす。

パアァァァァァン！

「痛っでぇぇぇぇぇぇぇ！」

「さっさと起きろ。飯食ったら今日の分の勉強を始めるぞ」

中三の夏休みの初日の朝、イッセーの叫び声をＢＧＭに俺はそう告げた。

――――――――――――――――――――

何故俺がイッセーの部屋で寝ていたのかと言えば、こいつに勉強を教えるためだ。

そもそもの始まりは昨日の終業式の帰りだった。

「ロウ、お願いだ俺に勉強を教えてくれ！」

「何処で頭打ったイッセー！？　お前が勉強？　冗談だろ！？」

普段から勉強なんてせずにエロ本か漫画しか読まないくせに勉強を教えてくれなんて正直耳を疑った。

「冗談じゃない！　とりあえずこれを見ろ」

「えっと、私立駒王学園入学案内・・・・って駒王学園！？　この辺りじゃ一番の難関校だろ？　お前の頭じゃたとえ天地がひっくり返ってもありえねえよ！」

「だからこそお前の力を借りたいんだ。俺一人じゃ無理でもお前の力があれば何とかなる！」

「そもそも何でここに入りたいんだよ？　ちゃんと理由を説明しろ」

「女子が多い！　女子高生に囲まれて授業を受けたい！　この学校でハーレムを作る！」

「このスケベが！」

そういえば駒王学園は数年前に共学になったばかりで女子の割合が多いんだったか。

実にこいつらしい理由だ。

「スケベで何が悪い！　いいか、俺にはもう入学早々彼女をゲットしてそのあと別れと出会いを繰り返して卒業の時に複数の女子が俺を取り合ってバトルロワイヤルをするという壮大な計画が立てられているんだ！　入試なんて最初の部分で躓くわけにはいかないんだ！」

「お得意のスケベ根性を発揮しろ。ことエロに関する理由ならお前なら何とか大丈夫なはずだ」

イッセーのエロに関するパワーは凄まじい。

昔、ある理由で喧嘩した時この俺が負けてしまったほどに。

「それでも難しいかもしれないんだよ。俺の期末の成績知ってるだろ？　全部赤点スレスレだよ！？　先生にも諦めろって言われてるしよおぉぉぉぉおおおおおおおおお！！」

悲嘆にくれるイッセーの姿を見ながら俺は頭を掻きむしる。

・・・・確かに、今のこいつじゃあ少し厳しいかもしれない。

いくらスケベ根性発揮しても基本的学力が足りないなら意味が無い。

そして、そんな風になったのは俺にも責任があって・・・・

・・・・仕方ないな。

「わーったよ。まったく、しょうがねえやつだ。今日からみっちり勉強をおしえてやるよ。ただし、途中で逃げるのは絶対に許さないからな。夏休みが終わる頃には『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎、好きな言葉は晴耕雨読』といった優等生に生まれ変わらせてやる」

「ちょっと待ったあああああああああああああッッ！　何ソレ？　もはや別人になっちゃってるよ俺？　そこまでしなくてもいいから普通に勉強を教えてくれるだけでも・・・・」

「学問に王道はなし！　さっそくお前ん家に泊まり込みで勉強会だ。おばさんもおじさんも快諾してくれそうだし何も問題はないな」

そう言って逃げようとするイッセーの襟首を掴んで引きずっていく。

「うわあああああッ！　誰か、誰か助けてぇぇぇぇ！」

さっきとは違う意味で叫ぶイッセーの声が辺りに響き渡った。

――――――――――――

「相変わらずおいしいっすねおばさん」

味噌汁をすすってからイッセーのお母さんに感想を言う。

俺は兵藤家のリビングにて朝食をごちそうになっていた。

ちなみにここにいるのは俺、イッセー、おじさん、おばさんの計四人だ。

二人には昨日事情を話したのだが予想通り快諾してくれた上に食事まで作ってくれる事になった。

適当にコンビニ弁当で済まそうと思っていたからありがたい。

「あら、おだてても何も出ないわよロウ君」

「お世辞じゃないですよ。それにしてもわざわざ俺の分まで作ってくれるなんてすみません」

「別にいいのよ。昔は家事が出来るようになるまで一緒に食べてたし、イッセーの勉強も見てくれているしね」

ちなみに俺の両親は殆ど家にいない。

仕事柄外国に行ったりする機会が多いので殆ど一人暮らしのようなもので、料理を作れるくらいに体が大きくなるまではお世話になっていた。

本当に俺って世話になりっぱなしだな。

「それにしてもイッセーが駒王学園にか・・・・正直どうなんだい？」

「それは・・・・・」

おじさんに聞かれちらりと横を見る。

そこには、生気が殆ど感じられない状態のイッセーが黙々と飯を食っていた。

たたき起こした時は反応があったのだがそれ以降は一言も喋っていない。

どうやら昨日の勉強を思い出して無意識に感情を封印しているのだろう。

たかだか十時間ぶっ通しで勉強しただけだってのに。

とりあえず懐からエロ本を一冊取り出し目の前に置いてみる。

だがしかし、エロの権化とでも言うべきイッセーが何の反応も示さない。

「だ、大丈夫なのかい？　イッセーがエロ本を前に何も言わないなんて・・・・」

心配そうな顔でおじさんとおばさんが俺を見てくる。

「大丈夫っすよ。むしろ、今なら勉強した事が簡単に頭に入る筈だから基本的な事は全部この夏休み中に覚えさせられます」

「そうか。それなら安心だね」

「そうね。今まで勉強しなかったツケが来ただけだし、しっかりとお願いね」

それを聞いて少々顔が引きつるのと同時に申し訳ない感じになってしまった。

「・・・・すみません。あの時、俺がイッセーを説得できていれば」

「いや、あれは君のせいじゃないよ。バカな夢を見たイッセーが悪い」

「そうよ。『不良になったらモテる』なんて幻想抱いて、結局彼女を作るどころかロクでもない噂が広まって敬遠されたのは自業自得よ」

そうだ。

中学に入ってからの二年間、俺とイッセーは不良として名を馳せた。

中学校の勉強なんてものは俺にとって苦痛でしかなかったし、むし

ろ小学校の六年間を真面目に行っていた事は奇跡に等しい。

そんな訳で前世と同じように授業をサボり、色々事件を起こすうちに俺は不良と呼ばれるようになった。

ここまではいい。

だが誤算だったのはイッセーまで俺と一緒に不良になった事だ。

理由は実にこいつらしく『不良になったらモテる』との事だった。

なんでもイッセーによると俺は学校の女子の間ではかなり人気があるらしく、それならば自分も不良になればモテるんじゃないか？

という考えに至った訳だ。

もちろん俺は説得した。

俺が不良をやってるのは学校の勉強が退屈だからでモテるのはイケメンだからだと何度も言った。

しかしそれを聞くたびに俺も不良になると言って聞かなかった。

最後には俺が根負けし、一緒に学校をサボって色々な事をやっていたのだが、ある日、悪友の元浜と松田からもたらされた噂話によってイッセーは不良をやめる事となる。

その噂話とは、美少女を見たら襲いかかる野獣イッセー。カップルを見かければ男をボコボコにし女の子を連れ去り、人目につかない所で鬼畜三昧のエロプレイを強制し、『くっくっく、見ず知らずの、それも彼氏をボコボコにした男の前で卑しい顔しやがってこのメス

○○がッ！！』と罵っては乱行につぐ乱行をし、さらにはボコッた男の方もあとでおいしく頂く、というものだった。

それを聞いた時のイッセーの顔は忘れられない。

ついでにイッセーを見る女子の目も忘れられない。

あれはあきらかに汚物を見る目だった。

ちなみに、その噂を流したのは以前俺達にボコられた不良グループの奴らで、しかも俺とイッセーのホモ疑惑まで流そうとしていたためにキツイお仕置きをした後、俺も不良をやめた。

あのまま不良を続けていたら面倒な事になりそうだったし、何より目的はすでに果たしていたからだ。

そして一学期の間、俺たちは広まった噂の鎮静に全力を注ぎ、とりあえずイッセーの評価は元不良のスケベとなり、俺は元不良のイケメンという事になった。

あまりの扱いの差にイッセーは血涙を流していたのはいい思い出だ。

そして今に至る訳だが・・・・

「あの時の写真はたくさん撮ってあるのよねぇ。特に中二の時なんてたくさんあるのよ。もしイッセーに女の子の友達がたくさん出来て家に来たら、是非ともアルバムを見せたいわぁ」

中二の時といえば、あの時のイッセーはまさしく中二病を発症していたな。

無駄にカッコつけな言動、髪を染めたりバイクを乗り回したりで大変だった。

間違いなくこいつの黒歴史となっているだろうから誰にも見られたくないはずだ。

まあ、イッセーにとっては儚い夢でしかないだろうが。

「まあ、よろしく頼むよロウ君。エッチなだけで悪い子じゃないんだから」

「それは分かってますって。・・・・ご馳走様でした。ほらイッセー、さっさと片付けて勉強するぞ」

とりあえず今日は文系科目を・・・・ざっと十二時間くらいやらせるか。

そんな事を考えながら俺は二階へ上がって行った。

――――――――――――――――――――

「よし、俺の作った問題の七割は解けるようになってきたし、この調子なら合格も夢じゃないな」

イッセーの答案用紙を見ながら俺はそう呟いた。

俺が勉強を教えるようになってから早二週間が過ぎた。今のこいつの学習速度は半端ない。

感情が消えているのに加え、エロ以外の知識が詰まっていないのが理由だろう。

スポンジが水を吸うみたいにどんどん覚えていく。

まあ、時々「おん・・・なのこ・・・・・お・・・・ぱい」

とか呟いているが気にしない気にしない。

ついでに放っておくと食事も睡眠も取らずに勉強し続けるがそれも気にしない。

夏休み最終日には力ずくで正気に戻すから問題は一切ない。

うん、今はこれでいい。

しかしあれだな。

ここまでやったんだから何かご褒美でもやってもバチは当たらないだろう。

今のうちにエロ本でも買ってきておいてやるか。

そう思い俺は家を出て馴染みの胡散臭い本屋に足を向けた。

少々値段は高かったが、まだ十八歳未満の俺たちは普通の店では買えないためこういった怪しい店で買わなくてはならない。

それでも置いてある本はそれほど凄い物でもないし、当然エロＤＶ

Dなんてものは売ってない。
松田や元浜はどうやってあれほどのエロ本やエロDVDを揃えてるんだ？
あいつらが独自のルートだから教えられないと言った時の顔を思い出したら殴りたくなってきた
数冊のエロ本が入った袋を持ったまま、俺は人気が無い方に進んでいく。
そして少し広い空き地に入った所で
「出てこいよ。さっきから尾けてるのは分かってんだよ」
尾行者に向かって声を上げる。
大体本屋を出た辺りから視線を感じていた。
色々と恨みを買っている身だが危ない奴らとの因縁は数ヶ月前に全て清算してある。
だから他校の不良かその辺りだと思ったのだがおそらく違う。
何というか、気配の質が違う感じがした。
少なくとも素人のものじゃない。
幸いにも一人しかいないようだし、最悪戦闘になってもなんとかなると考え空き地まで誘導したのだ。

俺が声を上げてから少しして、黒いスーツを着た男が出て来る。
黒髪の中肉中背でなかなかのイケメンだった（無論俺ほどじゃないが）。
そしてそいつを見た瞬間、俺が選択をミスった事に気づく。
こいつはやばい！
俺は前世も含めて今までかなりの修羅場を潜り抜けてきた。
それでも、これほどのプレッシャーは感じた事がない。
あきらかに人間が出せるようなものじゃない。
・・・・いや、そもそもこいつは人間なのか？
懐の獲物を何時でも取り出せるようにしながら男を睨みつける。
男は俺を一瞥するとゆっくりと口を開いた。
「よく気づいたな。貴様、知っているのか？」
「・・・・何をだよ？」
この状況だと俺がこいつの、あるいはこいつらの事を知っているかどうかだろうが、今までこんな人外じみた連中と出会った事なんて一度もねぇっての。

俺の返答を聞いた男は手を口元にやり少し考えるような仕草をする。
「ふむ。その様子だと何も知らないのだな。まあいい、私について来い。これは命令だ」
・・・・命令とはずいぶんと偉そうな奴だな。
どうする？　おとなしくついて行くか？
ほんの数瞬考え込み、
「断る」
男の命令を突っぱねた。
「・・・・言ったはずだ、ついて来いと。これは命令だ。聞かないのなら殺すまでだ」
殺す、か。
先ほどより増したプレッシャーを浴びながらも俺の冷静に思考し口を開く。
「何であんたについて行かなくちゃならないんだよこの〇〇がッ！　何だ？　友達か？　友達になりたいのか？　だったら願い下げだこのホモ野郎！　俺のノーマルなんだよそっちには欠片も興味はないし関わりたくもない。分かったならその汚い面こっちに向けるのやめてとっとと国に帰れどこぞのマフィア崩れっぽいおっさん！（殺すなんておっかない事言うなよ。俺たちは言葉が通じるんだからもっと文明人らしく会話で解決しようぜ）」

・・・・あれ？

何でだろう。本音と建前が逆になって出てきた。

「・・・・いい度胸だ」

しかもまずい事にキレちまった・・・・って俺のせいですよね。

一体どうしよう？

バッ。

色々考えている最中に音がしたと思えば、男の背中から黒い翼が生えていた。

・・・・うそ～ん。

「おいおい、マジで人間じゃなかったのかよ。　堕天使とかそんな感じの奴？」

「その通りだ。よく分かったな」

ブウン。

男の手に光の槍っぽいものが現れる。

・・・・本物の堕天使ですか。

神様よぉ、確かにあんたが言った通り原作開始前に襲われることに

なったわ。

でもさ、せめて相手が人間じゃないって事は教えてくれよぉぉぉ！

そんな事を思っているうちに男が光の槍を投げる。

狙いは俺の腹。当たれば致命傷は確実だろう。

それを他人事のように見ながら俺は、

「あっぶね！」

体を反転させ回避すると同時に持っていたエロ本を袋ごと投げつける。

狙いは堕天使の顔。もちろんこんなもので倒せるなんて思っちゃいない。

だが一瞬でもいいから視界を塞ぐのに成功した。

その一瞬の間に懐に左手を伸ばし獲物を引き抜く。

バン！　バン！　バン！

日本では聞く機会が殆どない音が響く。

俺の手に持ったデザートイーグルから出た発砲音だ。

俺は転生してから今まで何もしてこなかった訳じゃない。

鍛錬を怠った事はないし様々な知識も身に着けてきたんだ。
不良をやっているうちに出来た人脈を頼って銃などの武器と弾薬の入手ルートも確保した。
銃刀法違反？
そんな法律クソ喰らえだ！！
「ぐっ・・・・・！」
放たれた弾丸が堕天使の正中線――――――頭、胸、腹に見事命中し数歩よろめく。
実弾ではなくゴム弾だったが、それでも並みの人間なら一発喰らっただけで昏倒する代物だ。
それでもよろめくだけって、マジで人間じゃないんだな。
実を言うとコスプレしただけのおっさんです！　っていう展開を少しながら期待してたんだが。
「・・・・やってくれたな小僧！　まさかそんな物を持ち歩いているとはな」
「ハッ、今時の若者には気をつけろよ。すぐにキレて殺しちまうらしいからな」
「残念だが、そんなものでは私を殺せはせんぞ。実弾や魔力が籠っているならともかく、なんの変哲もないゴム弾では痛いとしか感じ

んよ」

・・・・魔力ときたか。

ますますファンタジーな感じになってきちゃってるよおい。

そんなもん使える訳ねぇし、実弾は家に置いてある。

普段から実弾持ち歩かねえのが仇になったな。

しかもこいつの言う通りなら現状、俺にはこいつを殺す牙がないという事か。

参ったな、詰んでるかも。

今の俺じゃあまともにやったら勝ち目はほぼ無い。

でも、

「勝てないからって、戦わない理由にはなんねえよ」

とりあえず、やれる事は全部やってやる。

もちろん、最終的に狙うのは勝ちだ。

負ける気なんて欠片も持ち合わせちゃいねえしな。

「良い目だ。覚悟を決めたか」

再び光が集まりだし、新しい槍が現れた。

「おう。とりあえずあんたをぶっ倒して家に帰らせてもらうぜ！」
思考しろ模索しろこいつを倒す方法！
弾丸残り五発弾倉一つ計十三発奥の手はまだ早い相手の情報を集めるのが最優先。
とりあえず頭に狙いを定め一発撃つ。
が、何やら魔法陣のようなものが現れて弾かれた。
「わざわざ喰らってやる趣味は無いのでな。防御障壁を張らせてもらった。これで、お前が勝てる可能性は完全にゼロになったな」
関係ねえっての。
ハナからまともにやっても勝ち目がない事くらい分かってんだよ。
奴はお返しと言わんばかりに幾つもの光の槍を投げて来る。
さっきもそうだったが別に弾丸みたいに速いってわけじゃない。
現に俺は躱す事が出来た。
なら！
俺は　前方に走りながら最小限の動きで槍を躱し続ける。
一見自殺行為にしか見えないが、飛び道具を持った相手に対しては

接近戦がセオリーだ。
接近した方が攻撃を避けやすいし懐に潜り込めれば使いづらくなる。
銃ならここまで上手くいかないが、幸いにも相手は投槍。
俺の動体視力なら十分に対処可能だ。
時折槍が身を掠めるのを感じながら俺は相手から八m程まで近づき、銃を全弾発砲する。
よく狙えなかったため五発中四発は見当違いな方に飛んで行ったが五発目は頬を掠った。
それを見た俺はジグザグにステップを踏みながら後退し、槍を躱すと同時に距離を取る。
同時に空になった弾倉を捨て予備のものを装填する。
これで残り八発。
これを撃ち尽くした瞬間、俺の攻撃手段はほぼ失われる。
肉弾戦は出来ないわけじゃない、むしろ得意だ。
しかし人外相手に殴り合いは無謀に等しい。
それ故に撃ち尽くせば限りなくゼロに近い勝率が更に下がるだろう。
「正直驚いた。貴様の身体能力は我々や悪魔にも匹敵するぞ。それ

に見たところ命をかけた戦いにも慣れているな。本当に何も知らない一般人なのか？」

「知らねえよ。俺はどこにでもいるちょっと危ないイケメンだよ」

しいて言うなら転生者ってとこか。

「・・・・まあいい。どの道、ここで死ぬ以上関係はない」

またしても両手に光が集まるが何かが違った。

光が収束した時、奴の手には今までの物よりもはるかに短い短槍が大量に握られていた。

「とりあえず、質よりも量でいかせてもらおう。全て避けられるか？」

ヒュッヒュヒュヒュヒュッッ！

まるで棒手裏剣のように投げられた槍の狙いは大雑把だったが今までに比べとにかく数が多かった。

おかげで潜り抜けられるような隙間もない！

「チイッッ！！」

避けられないと判断した俺は咄嗟に体に直撃するコースの槍を計四本撃ち落とす。

これで残り四発か。

もう無駄撃ちは出来ねえ。

だが、今ので気づいた事もある。

あの槍、数を重視してるせいか威力が普通のに比べて格段に低い。

ゴム弾で撃ち落とせた事から考えてまず間違いない。

もちろん俺の命を奪うだけの威力はあるが、おそらく急所に当たりさえしなきゃ二、三本喰らっても死なないとは思う。

頭の中で情報をまとめつつ俺は勝つためのシミュレーションを続ける。

そして、

「・・・・これしかねえよな」

こいつを倒す方法を思いついた。

正直リスクは高いが勝つにはこれしかない。

「防いだか。なら、これならどうだ！」

またしても大量の槍が飛んで来た。

俺は右足、心臓、頭のコースの槍三本を撃ち落とし、それ以外の槍は右腕を盾にして出来るだけ防いだ。

「――――――ッッ！！」

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い！！

やべえ、超痛ぇぇぇぇ！！！！

今まで喧嘩やら何やらで痛い思いは何度もしてきたがこれほどの痛みは数える程しかない。

俺はそのまま片膝を着き負傷した部分を確認する。

刺さっていた槍が消えたせいで血が噴き出していたので実に分かりやすい。

右腕・・・・前腕に三本、上腕に二本、血が勢いよく吹き出しているので動脈が傷ついているのは間違いない。だが、まだ動かせるという事は筋肉と神経は無事。

右肩・・・・一本が僧帽筋の部分に刺さったが問題なく動く。

左脇腹・・・・おそらく一本が貫通。出血量が少ない事から臓器及び動脈は傷ついていない。

とりあえず右腕が一番の重傷だな。

このままいけば出血多量で意識が飛ぶのは時間の問題だろう。

両手を地面に着き歯を食いしばりながら痛みを堪える。

・・・・我慢しろ我慢。痛いのを顔にだすなポーカーフェイスを保

て。

そしてそのまま堕天使を睨む。

「よくここまで粘ったな。だが、貴様の命はここまでだ」

堕天使は俺にそう言うと手に槍を作り出し投擲の体勢に入る。

「最後に何か言い残す事はないか？」

「・・・・死ぬ以上関係ない、だろ？」

「そうだな。恨むなら、貴様に神器を宿させた神と、運悪く私に見つかった自分を恨め」

そして俺に止めの一撃を刺すための槍が投げられる。

俺はうつむいて地面に両手を着いたまま

「バーカ」

にんまりと笑みを浮かべる。

その瞬間、俺は奥の手を発動する。

まず最初に周りの光景がスローになる。

当然、光の槍もスローとなり俺に向かってゆっくりと飛んでくる。

続いて痛みが消える。

怪我が治ったわけではない。

痛覚が麻痺しただけだ。

そして最後に体中に力があふれてくる。

今の俺なら人間の限界を超えられるだろう。

準備は整った。

あとは逆転あるのみだ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

片膝と両手を着いた状態――――クラウチングスタートの体勢から一気に走り出す。

文字通り人間の限界を超えた動きで堕天使との距離を一瞬でゼロにする。

こいつからしてみれば瞬間移動したように見えただろう。

驚愕した顔で俺を見ていることからまず間違いない。

そして、その開いた口の中にデザートイーグルの銃口を突っ込み、

「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ．（さようなら）天国に逝っちまいなクソ野郎」

決め台詞と共に引き金を引いた。

――――――――――――

わざと怪我をして油断させ、そこから一気に接近し急所にぶち込む。

それが俺の立てた作戦とはとても言えないような作戦だった。

この作戦を思いついたのは攻撃の殺傷力が低くなったのと二つの仮説が立ったからだ。

最初に接近した時に弾丸が頬を掠っていた。

これはつまり障壁が働いていなかったという事になる。

そしてその時、奴は俺に攻撃していた。

この事から俺は攻撃と防御を同時に行えないという仮説を立てた。

さらにあいつはゴム弾を痛いと言っていた。

痛いという事はすなわちダメージは通っていることに他ならない。

ならば目や口の中を狙えば殺す事も可能な筈だ。

接近のために必要な足をかばった時は気づかれないかとヒヤヒヤしたが何とかなった。

そして、俺を殺そうとした堕天使は、

「・・・・死体も残らねえって、便利な奴だなオイ」

跡形もなく消えていった。

死体から何か分からないかと調べるつもりだったが、これではどうしようもないな。

そんな事を思っているうちに俺は仰向けに倒れた。

・・・・ちょっとヤバイかも。

血を流し過ぎたせいで立っていられなくなったか。

ポケットから携帯電話を出そうとするが、体が全く動かない。

ここにきて奥の手の副作用がきたか・・・・！

俺の奥の手・・・・自分ではスーパーモードと呼んでいる状態は、いわゆる脳内麻薬を大量分泌させ一時的に身体能力を大幅に上昇させるものだ。

昔バイクで事故った時から出来るようになったもので、俺の意思でいつでも使えるというまさにスーパーモードなのだが、ようは肉体のリミッターを無理矢理外しているだけなので使用後は体に力が入らなくなるという欠点がある。

とはいえ本来は指一本動かせないほどのものではない。

本当に血が足りなくなってきているのだ。

視界も霞んできたしこれは本格的にヤバイぞ。

ザッ

そんな中俺のすぐ傍で足音がした。

あらん限りの力で見てみれば霞んだ視界の中に誰かがいるのが分かる。

「君の戦い、見させてもらったよ。中級堕天使、その中でも下の方とはいえ神器も魔術も使わず倒すとは驚いた。正直助けたかったが堕天使とはあまり関わりを持ちたくなくてね。すまなかった」

声からして男だがそれ以外はわからなかった。
しかし敵ではないという事はわかる。
「とりあえず治療をしよう。病院は無理だから私の拠点の一つに連れていかせてもらうよ」
そう言って俺を軽々と担ぎ上げると足元に魔方陣らしきものが現れる。
「・・・・あんたは、一体？」
「私かい？　私の名はシュベルト。――――――――しがない魔術師さ」
薄れゆく意識の中で俺は男の名を聞いた。
これが、俺と俺の魔術の師匠、シュベルト・フレイヤーとの出会いであり、俺の物語の始まりだった。

Ｌｉｆｅ．２　弟子入りしました

「・・・・知らない天井だな」

目を覚ますと大きめのベッドに横たわっていた。

確か、堕天使を倒してから倒れてその後に・・・・

「目が覚めたかい？」

そう、この声の主に助けられたんだったか。

首を声のした方に向けるとメガネをかけた金髪の男がいた。

背は俺よりも高く、かなりがっしりとした体つきであることは分かる。

「えっと・・・・シュベルトさんでしたっけ？」

意識を失う直前にそう名乗ったはずだ。

「そうだよ。シュベルト、シュベルト・フレイヤー。世界中を旅して回っている魔術師さ」

魔術師・・・・か。

堕天使もいるんだし別におかしくはないが、

「信じられないって顔だね」

「あ～、分かります？」

どうやら信じられないって顔に出ていたらしい。

「まあね。確かに普通の人からすれば信じられないだろうけど」

シュベルトさんは手を前に出すと、

「これならどうだい？」

手のひらに青い光が現れた。

「・・・・すげえ」

俺はそれを見てただスゴイとしか言えなかった。

もっとよく見てみようと身体を起こすが右腕と脇腹に激痛が走った。

「～～～～～ッツ！！」

「あまり激しく動かない方がいいよ。傷はまだ完全に塞がってはいないからね」

ここで俺は自分の身体の状態を認識する。

ズボンは穿いているが上半身は裸だった。

右腕は包帯でぐるぐる巻きにされており、その包帯には何かよく分からない文字が書かれてある。

胴体にも巻かれていたがこちらは普通の包帯だった。
「右腕が一番の重傷だったからね。薬だけではなく自己治癒能力を活性させる呪文が書かれた包帯を使っているんだよ」
俺の考えを読んだのか、口に出す前に答えてくれた。
そういえば右腕は穴だらけになったんだっけか？
「小型の槍で助かったね。普通の大きさの槍なら貫通して死んでいたよ」
「まあそうでしょうね。でも、俺は生き残った」
生き残れたのだから文句は言わない。
ようは結果が全てだ。
俺は身体をなるべく動かさないようにして部屋を見渡す。
ベッド以外には机と椅子、そして本棚しか家具がない。
床には魔方陣が幾つも描かれているが、それ以外は殺風景な部屋だ。
「ここは私の日本の拠点でね、必要最低限のものしか置いてないんだよ」
またしても心を読んだかのように先に答えられる。

日本の拠点ってことは少なくともここは日本の何処かってことか。

ぐう〜

そんな時俺の腹が鳴った。

・・・・こんな時に鳴るなよ。

「丸一日寝ていたんだ。気にしなくてもいいよ」

「丸一日!?　そんなに寝てたんスカ？」

「怪我よりも出血の方が酷かったからね。とりあえず食事の用意は出来てるからついて来てくれるかな？」

俺は驚きつつもゆっくりとシュベルトさんについて行った。

――――――――――――

「――――さて、聞きたいことがあるんじゃないかな？」

食事を終えてからテーブルを挟んでシュベルトさんは俺にそう尋ねてきた。

聞きたい事、それはすぐにわかった。

むしろわからないほうがどうにかしている。

「はい。教えてください――――――――俺も魔術使えますか！？」

ズルッ！

何故かシュベルトさんが思い切りこけた。

え・・・・俺何か変な事言ったか？

「い、いや、普通は堕天使とは何なのか？　とか、何故自分が襲われたのか？　とか聞くべきじゃないのかい？」

ああ、そっちの事か。

「すみません。魔法とかってなんというかこう、ファンタジーな感じがしていいじゃないですか。自分も使えればな～って思ってたんですよ」

「ま、まあそれは後から答えるとして、まず君は知らなければならない。この世界の裏側というものをね」

そうしてシュベルトさんは俺にこの世界の事を語り始めた。

天使、悪魔、堕天使、神器、その他諸々。

・・・・うん、物騒なんてもんじゃねえええええ！！

全て聞き終えた時に心の中でそう叫んでいた。

予想よりもはるかにスケールがでかいっつーの！

「落ち着きたまえ薊屋狼士君」

名前を呼ばれて我に返るが、その瞬間疑問が生じた。

「何で俺の名前を知ってるんですか？」

「少々悪かったが君の財布の中身を見せてもらったんだよ。そこに学生証が入っていたんだ」

そう言って懐から出したのは俺の財布、携帯、そしてデザートイーグルだった。

それらを受け取りポケットの中に突っ込んでいく。

銃に関しては上着がないのでそのままだ。

「それにしても、よく中級堕天使を殺せたものだ。実力は下の方だったし油断もしていただろうが普通の中学生では勝つどころか生き残る事すらできないというのに」

「わりと修羅場潜ってるんで」

「そうだろうね、君の身体の古傷を見ればわかるよ。しかし、次はうまくいくとは限らない」

・・・・その通りだ。

もしシュベルトさんが治療してくれなかったら今頃死んでる。

「あの堕天使は偶然君を見つけただけのようだったが、もし『神（グリゴリ）の

子を見張る者』そのものに見つかっていれば逃げる事すら出来なかっただろうね」

「『神の子（グリゴリ）を見張る者』って確か俺みたいな神器所有者ってのを集めたり始末してるんですよね」

「そう、そして君は既に堕天使を殺しているから危険と判断されて始末されてもおかしくない」

つまり、次に見つかった時は殺されるって事か。

「君の選択肢は二つ。おとなしく殺されるか、戦うかだ」

「戦います」

俺は即答した。

こんなもの悩むまでもない。

「黙って殺されるなんて冗談じゃない。派手に暴れて返り討ちにしてやりますよ」

おとなしく殺されるなんて選択するなら、俺は今頃ここにはいない。せっかく手に入れた新しい命を捨てるなんて冗談にもならないっての。

「・・・・そうか」

シュベルトさんはそう呟き、俺の目をまっすぐ見てくる。

俺もシュベルトさんと目を合わせしばらくのあいだ見つめ合う。
ちなみに読者の諸君に言っておくが俺はノーマルだ。
決して変な趣味に走っているわけじゃない。
「先程君は魔法が使えるかと聞いたね。使えるよ。君は見た所なかなかの潜在能力をもっている。よければ私が君に戦う術を伝授しよう」
シュベルトさんはふと目を閉じそう言った。
「・・・・ありがたいですが、一体どうしてですか？　あなたには何のメリットもないし、それに堕天使とは関わりたくないって言ってませんでしたか？」
「確かに私は堕天使とはあまり関わり合いたくない。昔色々とあってね。しかし、私は今まで長い事生きてきたが君ほど面白い人間を見た事がない。君が一体どこまで行くのかを知りたくなったのさ」
「・・・・変わってますね」
「それは、お互い様だよ」
互いに苦笑しながら俺は椅子から立ち上がり
「これからよろしくお願いします“師匠”」
俺は深々と頭を下げた。

「うん。これからよろしく、狼士君」

「ロウって呼んでください。皆はそう呼びます」

「そうなのかい？　では改めて自己紹介をしよう。私の名はシュベルト・フレイヤー、今年で九十歳になる老いぼれだがこれからよろしく、ロウ君」

見かけ二十台の師匠の実年齢を知っても俺は驚かなかった。

薄々感づいていたからだ。

あまりにも雰囲気と外見の年齢が釣り合っていなかったからな。

こうして俺は師匠に弟子入りしたのだった。

――――――――――――――――――――

「そういえばロウ君、家に連絡しなくてもいいのかい？」

「やっべ、忘れてた！　おじさんとおばさんに連絡しとかないと。・・・・あれ？　何か忘れてるような」

――――――――――――――――――――

～その頃のイッセー～

「お・・・・・・・おっぱ・・・・・・・・・い」

――――――――――――――――――

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！　マズイ！　イッセーのやつ、勉強させたままだああああああああああああああ！！　師匠、ちょっと家まで送ってください。　このままじゃイッセーが廃人にいいいいいいいいいいいい！！」

この後、おじさんとおばさんに多少ぼかした事情を伝えイッセーの管理を任せた俺は、残りの夏休みを修業で過ごす事となった。

Ｌｉｆｅ．３　修業、始めました（前書き）

今回の出来はちょっとイマイチかもしれませんがどうぞ見てください。

それと、ロウの神器が出てきます。

Ｌｉｆｅ．３　修業、始めました

弟子入りした次の日、さっそく修業が始まった。

拠点はどうやら山奥にあったらしく周りを見渡しても木と岩と川しかない。

まあ、修業と言ったら山なので丁度いいだろう。

そう思いながら黒いジャージに着替えた俺は念入りに柔軟をしていた。

先ほど包帯を外したが怪我はもう塞がり痛みも感じなかった。

特に穴だらけになったはずの右腕は傷痕すら残っていない。

魔術って本当にスゲーな。

そうしているうちに同じように黒のジャージを着た師匠がやって来た。

「調子は良さそうだね。準備は出来てるかい？」

「はい、いつでも行けます師匠！」

師匠に向き直り大声で返事する。

いよいよ修業の開始だ。

まずは何をやるんだろうな？

「よろしい、では修業を始めよう。まず最初に君の神器を発現させる」

神器、神から与えられた規格外の能力。

・・・・俺の神器ってどんなのだろ？

めちゃくちゃドキドキしてきた。

「まず手を上にかざして目を閉じ、そして自分が一番強いと思う存在を想像してみなさい」

「一番強い存在・・・・。ドラグ・ソボールの空孫悟ですね」

イッセーの部屋にある特装版を全部読んだが、あれはなかなか面白かった。

特に空孫悟なんてドラゴンボールの主人公並みに強かったし。

「では、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべるんだ」

俺は心の中で空孫悟がドラゴン波を撃つ姿をイメージする。

「そして、その姿を全力で真似るんだ」

こ・・・この歳になってそれをやるのか？

は、恥ずかしすぎる！

け、けどやるしかない。

幸いにもここには師匠以外いないんだし。

「ド～ラ～ゴ～ン～波ぁぁぁあああああ！！！！」

両手を上下に合わせて前に突き出したポーズで声を張り上げる。

クソッ、なんだこの羞恥プレイは！？

「目を開けなさい。多くの魔力が漂うこの土地なら神器は容易に発現する筈だよ」

師匠の言う通り目を開ける。

カッ！

俺の右腕が光り出した。

うおおおおおお！

な、何だ？　何が出てくる？

光はしだいに俺の右腕に形を成し、そして光が止んだ時そこにあったのは、

「これは・・・・鎖か？」

数本の鎖が俺の腕にまとわりついていた。
大きさはごく一般的なものだがどこか禍々しい感じがする。
しかもそれは俺の右腕から生えていた。
正確に言えば根本の部分は透けているんだが。
「師匠、この神器は一体？」
とりあえず師匠に尋ねてみるが、師匠も難しそうな顔をしてこの鎖を見ていた。
「ふむ・・・・私も見た事がない神器だね。鎖の形をした神器というものは聞いた事もない」
「師匠でも分からないんですか」
「私など天使や悪魔にとっては百歳も生きていない若造だよ。だが、これを知っている可能性がある者が一人いるな」
「誰っすか？」
「堕天使の総督、アザゼルだ」
へ～、堕天使の総督・・・・・・って、
「つまりは『神の子を見張る者』のトップって事でしょ！？　そんな相手に聞きに行ける訳ないですよ」

「その通りだ。とりあえず自分たちで把握できる所まで把握してみよう」

その後、色々と実験をして分かったことは、

自分の意志で自由に動かせる。

右腕だけではなく、体全体から鎖を出せる。

鎖の本数は最大で十本。

延ばせる距離は最大で二十m。

強度は普通の鎖よりも遥かに頑丈。

という事だった。

「なんか弱っちいですね」

それが俺の感想だった。

もっとこう、派手な物を期待してたんだが。

「そんな事はないさ。頑丈さはかなりのものだ。結構強めの魔術でも壊れなかったのだからね」

確かに師匠の言った通り頑丈さだけは中々のものだった。

師匠が放った炎やら水のカッターやら雷やらでも壊れなかったからな。

・・・・・最終的にちょっと本気を出した師匠が何かをしたら粉々になっていたが。

何をしたかは分からない。

あまりの衝撃で気絶してたんだ。

目を覚ましたらデカいクレーターが出来てたよ・・・・・・。

師匠曰く「私の切り札の一つだよ」との事らしい。

本当に師匠は人間なのか疑いたくなった。

「上手く使う事が出来れば化けるかもしれないし、君ならひょっとしたら禁手に至れるかもしれないよ」

「えっと、その禁手ってかなりレアな現象って言ってませんでしたっけ？」

神器は日々進化しているが、特定の領域に至った者が発揮する力の形があるらしい。

それが禁手、使いようによっては「世界の均衡を崩す力」と言う意味でそう呼ばれるもの。

「なんとなくそう思ったのだよ。さて、検証も終わったことだし、いよいよ君に魔法、魔術と呼ばれているものを教えよう」

「――――――ッ！　お願いします！！」

神器の事は大体分かった。
次は魔法だ、死ぬ気で覚えてやるぜ！！

―――――――――――――――――――――

レッスン１　師匠による講義

「私たちが使う魔術、魔法といったものは、悪魔の魔力体系を伝説の魔術師『マーリン・アンブロジウズ』が独自に解釈し再構築したものだ。その他にも北欧式、悪魔式、堕天使式、黒魔術、白魔術、精霊魔術といった術式がある。そしてそれらを扱うために必要な魔力だが・・・・・」

「どうしたんですか師匠？」

「我々人間が魔力を扱うには、まず自分の中の魔力を目覚めさせなければならないのだが、これが非常に面倒でね。という訳で・・・・・」

そう言いながら師匠は懐から怪しげな色をした液体の入った小瓶を取り出す。

・・・・・まさか。

「この薬で強制的に君の中の魔力を覚醒させる。大丈夫だよ死にはしない・・・・・・と思う」

「思うって何ですか思うって！？　そんな危ないものは勘弁してほしいんですけど！！」

「仕方ないんだよ。普通の方法だと年単位で時間がかかるんだ。そして、君にはそこまで悠長にしていられる時間があるかは分からない」

・・・・師匠の言う通りだ。

今度堕天使と会うのはいつかは分からない。

数年後かもしれないし一週間後かもしれない。

俺に出来るのはそれまでに力をつける事だ。

ならば迷ってる暇なんて無い。

「・・・・師匠、その薬ください」

俺の言葉に頷いた師匠は俺に薬を渡してくれる。

うわ、近くで見るとますます怪しい色してんな。

「・・・・一つ忠告だが、その薬は一気に飲むんだ。少しづつでは意味が無い」

「分かりました。それじゃあ、いきます！！」

ゴクッ！

喉を鳴らして一気に飲み干す。
変化はすぐにやって来た。
「グッ――――――！」
まるで内臓がぐちゃぐちゃに掻き回された感じがする。
とにかく気持ちが悪い。
俺はその場にうずくまり、体の悪寒に必死に耐えていた。
息苦しい、鼓動が早い、眩暈がする。
歯を食いしばり拳をきつく握りしめるが少しも楽にならない。
すぐ傍にいる師匠が何かを言っているのが口の動きで分かった。
おそらくは俺を励ましているのだろうが何も聞こえない。
そしてそのまま俺の意識は途切れた。
――――――――――――――――――――
「・・・・・・うっ」
「目が覚めたみたいだね。　体の調子はどうだい？」
俺の意識が戻った時、師匠が声をかけてくれた。

どうやらずっと傍に居てくれたらしい。

本当にいい人だよなぁ師匠って。

「・・・・少しだるいですけど大丈夫です」

体の調子を確認してから立ち上がり空を見上げる。

・・・・太陽の位置からしてそんなに時間は経ってないな。

「師匠、俺はどのくらい寝てたんですか？」

「一時間ほどかな。驚いたよ、普通なら八時間は目が覚めないんだけどね」

「それって、俺の魔力が少ないからとかそんな理由ですか？」

「逆だよ。君の魔力が多いからこそ、これ程早く目が覚めたんだ」

俺の魔力が多い、か。

そう言えば体が薬を飲む前までとは違う感じがする。

何というか、元々あったものが動き出したような感じだ。

これが魔力なのか？

「よし、魔力にも目覚めたことだし次は魔力の扱いについてだ」

レッスン2　師匠との魔力修業

「魔力とは全身を覆うオーラから流れるように集める。意識を集中させて魔力の波動を感じるんだ」

師匠から説明を受けひたすら意識を集中させる。

昨日師匠がやっていたように手のひらに魔力を集める・・・・・！

ボンッ！

「ぬおおぉぉぉ！」

で、出来た！

バスケットボール大の魔力の塊が手のひらに現れた。

「よっしゃあぁぁぁぁ！！」

やった。

これで俺も魔術が使えるんだと思ったら思わずガッツポーズをしていた。

「中々の大きさだね。次は炎や水、雷をイメージして魔力を変化させるんだ。初心者は実物を魔力で動かした方が上手くいくから」

「燃えろ燃えろ燃えろ燃えろおおおおおおおおおお！！」

ハイテンションになっていた俺は師匠の変化させるという言葉を聞いた瞬間に始めてしまっていた。

魔力の塊が炎へと変化していく――――――――って、

「熱っちいいいいい！　ちょっと、コレ、熱ッ！」

手がめちゃくちゃ熱い！

炎の熱がモロに俺の手を焼いてんのか！？

「ふおおおおおおお！！」

咄嗟に炎を飛ばそうと念じたところ、炎の球が俺の手から一直線に飛んで行きその先にあった川に命中した。

次の瞬間、

ドッバアアアアアアアン！！

水蒸気爆発が起こり、熱せられた水が俺に降り注いできた。

「ぎゃあああああああ！　あっちいいいいいいいいいいい！！」

俺はその場でのた打ち回り、復活したのはそれから十分後だった。

――――――――――――――――

「人の説明は最後までしっかり聞くべきだよ。今回の事は完全に自業自得だね」

「・・・・・・はい」

熱湯地獄から解放された後、俺は正座させられ師匠の説教を受けていた。

全て俺に非があるので何も言い返す事は出来ない。

ちなみに師匠は障壁らしきものを張り無傷だった。

「しかし、私も君の才能を見誤っていたようだ。初めてだというのにあれほど高熱の炎を作り出せるとは思っていなかったよ」

「あの～そんなに凄い事なんですか？」

「さっきも言おうとしたが、普通は実物を魔力で動かす事から始めるんだよ。君はその過程を飛ばしていきなり魔力をイメージで変化させる事ができた。これは凄い事なんだよ」

ありがたい事に魔術に関しても俺は才能があるらしい。

今まで大抵の事は出来たが、正直魔術については自信が無かったからな。

「しかし、修業が全然足りていない。炎の熱が手に伝わったのはそのためだ。これから君にみっちりと教えるからそのつもりでいなさい。分かったね？」

調子に乗らないよう俺に釘を刺してくる師匠。
確かに増長するのは良くない。
俺は所詮、人間なのだから。
「はい！　これからもお願いします師匠」
俺は師匠に元気よく返事し立ち上がる。
・・・・ちょっと足がしびれていたのは秘密だ。
「うん、いい返事だ。それからロウ君、ちょっと見ていなさい」
師匠が右手を上に掲げ指を開く。
何するんだろ？
「君のやった魔力を炎へと変化させる技は極めればこんな事が出来る」
師匠の五本の指先にビー玉くらいの大きさの青い炎の球が出来た。
大きさこそ俺の作ったものに比べればかなり小さいが、込められた魔力も熱量も桁違いだ。
「ここで使う訳にはいかないが・・・・そうだね、解放すればこの辺りの地形は変わるだろうね」
そう言ってから炎の球は音もなく消え去った。

てゆーか地形が変わるって・・・・。

「名前を“フレア・ボム”、私が若い頃に編み出した切り札の一つだよ」

「・・・・それで俺の神器を壊したんですか？」

「いや、壊したのは別の切り札だよ」

・・・・こういうのをチートって言うんじゃねえのかな。

そうして俺の魔力修業は日が暮れるまで続けられた。

――――――――――――――――――――

レッスン3　師匠との組手

夕食を取ってから師匠と組手をする事になった。

夜の山奥なので光は月明かりしか無い。

それなのに組手とは疑問に思ったが、師匠が言うのだからちゃんとした理由があるのだろう。

「どこからでも来なさいロウ君。何、老人だからと言って手加減はいらないよ」

そんな事を言ってるけどまるで隙がないですよ師匠。

しかも黒いジャージを着ているので保護色となり、とても見えづらい。

これでは当てる事さえ難しい。

だがそれはこっちだって同じだ。

ならば先手必勝。

先に一撃通した方が主導権を握る！

俺は師匠に向けて左ジャブを放った。

スピード優先でダメージを与える事は考えていない。

まずは一回触れてから距離を測り、そこから本命の右フックを叩き込む。

そのつもりだったが、

「んなッ！？」

師匠はいとも簡単に俺の攻撃を避け、射程外に移動していた。

「なら――――――ッ！」

コンビネーションに蹴りを加えた打撃技を一息に六連続で繰り出す。
しかし師匠は流れるような動きでそれを回避し、俺の動きが止まった一瞬を見計らって魔力弾を打ち込んできた。
当然回避できる筈もなく、俺は派手に吹っ飛ばされた。
「ゴホッゴホッ！　・・・・・師匠、魔力使うなんて反則じゃないすか？」
「いやいやロウ君、もしあそこで普通に手足を使った攻撃をしていたら、掴んで関節技に持ち込む気だっただろう？　流石に力比べで若い子には勝てないからね」
――――――ッ！　見抜かれたのか。
普通の攻撃は全て避けられると直感した俺は、あえて使用後の隙がでかい技を使い攻撃を誘い込むつもりだった。
そこから関節技、あるいは寝技に持ち込むつもりだったんだが・・・・・。
「肉を切らせて骨を断つ。それが君のスタイルである事は分かってたからそう来るのも読めていた。その戦法が悪いとは言わないが、堕天使や悪魔、その他の裏の世界の存在を相手にするには危険すぎる」
「・・・・どういう事ですか？」

「簡単な事だよ。我々はあくまで人間だという事を忘れてはならない。身体能力がいくら高くても耐久力という点において私たちは彼らに遠く及ばない。そして彼らの攻撃は私たちの肉体を簡単に破壊する。肉だけを切らせるつもりが骨まで断たれていた、なんて結果になりかねない」

それはまさしく正論だった。

俺の戦い方では相性が悪すぎる。

それを師匠は言いたいのだろう。

「故に君が覚えなければならないのは防御と回避だ。肉体への直撃は何としてでも避けなければならない。今ならこの組手の意味が分かる筈だよ？」

「・・・・この暗闇の中じゃ視覚は頼れない。だから他の感覚を総動員しなければならない。そしてそれが防御と回避能力の向上に繋がる・・・・そんなところですか？」

「正解だ。音、空気の流れ、匂い、そして第六感。これらはある意味視覚をも上回る情報を得る事が出来る。私が君の攻撃を全て捌ききったようにね」

この暗闇の中で俺の攻撃を全て捌ききった師匠は確かに凄い。

でも、それは長い修練と経験によるものだろう。

師匠レベルにたどり着くのにどれほどの時間がかかるか分からない。

少なくとも数年じゃ無理だ。

それに、

「分かっているよロウ君、今までの戦いで体に染みついた動きはそう簡単には無くならない。それに、ひたすら防御と回避しかしないのは自分の性に合わないのだろう」

「・・・・本当に師匠は俺の考えを読んできますね」

何発貰ってもいい、だから一撃でお前の命を貰う。

それが俺の前世からのスタイルだ。

今更そう簡単に変える訳にもいかない。

只の意地かもしれないが俺にとっては大切な事なんだ。

「年の功だよ。実を言えば方法がない訳でもない。ある技術と魔力による強化を合わせれば人間でも相当な耐久力を得る事が出来る」

「その技術って何なんですか！？」

俺は起き上がって師匠に聞く。

「今の君にはまだ早い。魔術を一通り扱えるようになったら教えよう。そして・・・・」

師匠は俺の手を取り立ち上がらせてくれる。

そして俺の肩を叩きながらこう言った。

「どうせなら全部やればいい。どちらかしか駄目なんて一言も言っていないよ」

一瞬呆けて、その後、

「あ、あはははははは！！　　し、師匠、それって欲張り過ぎじゃないですか？」

「人間は強欲な生き物だよ。知らなかったのかい？」

思い切り笑ってしまった。

そうだな、どうせやるなら全部覚えればいい。

簡単な事じゃねえか。

「それじゃあ師匠、続きをお願いします！！」

「うむ、かかって来なさい」

そうして組手は俺が疲労困憊で気絶するまで続き、俺の修業初日は終わったのだった。

Ｌｉｆｅ．３　修業、始めました（後書き）

今回出てきたロウの神器、分かる人は分かると思います。
結構オリジナル要素を入れるつもりなので元とは幾つか違います。
魔力に関しても幾つかは独自設定ですのでその辺りはご了承お願いいたします。

Ｌｉｆｅ．４　夏休み、終わりました（前書き）

今回はいつにもまして駄文です。
後半は特にグダグダになっていますがどうぞ。

Ｌｉｆｅ．４　夏休み、終わりました

ふと気がつけば薄暗い部屋にいた。

ただ暗いだけなら問題は無かったのだが、残念ながらそうじゃない。

部屋中に血の匂いが漂い、いたるところに拷問具が立ち並んでいる。

鎖、針、車輪、桎梏、短刀、糸鋸、椅子、螺子、漏斗、仮面、石版、その他様々。

どれもこれも人、あるいはその他の存在を責め苛むように設計されたものばかりだ。

・・・・またこの夢か。

この部屋に来るのは初めてじゃない。

修業初日、神器を発現させた日から毎日来ている。

一日の修業を終えてから眠ると必ずこの部屋にいるのだ。

最初は訳が分からなかったがもう慣れてしまった。

そして、

「・・・・いつ見ても気味が悪いな」

部屋のあちこちから黒い靄が現れ、俺の方に向かってくるのも慣れ

てしまった。

靄が俺の体を覆うと何やら負の感情が流れ込んでくる。

憎い、憎い！！

一人のものではない。

おそらく何十、何百といった人間の感情、憎しみが俺の中に流れ込んできている。

いや、憎しみだけでじゃないな。

一番強いのが憎しみというだけで他の感情も含まれている。

怒りや恐怖、それに・・・・・嫉妬か？

何故嫉妬なんて感情があるのかは分からないが、とりあえず今はどうでもいい。

俺は体を覆う黒い靄を見ながら気合を入れて、

「知るかボケ」

その一言でそれら全てを打ち砕くのと同時に、現実へ帰還するのだった。

―――――――――――――――――――――

修業開始から早三週間と数日が経った。

今日は夏休み最終日、つまり俺の修業の最終日でもある。

本当はもっとやりたいのだが、もう学校をサボる訳にもいかないし
師匠も師匠で旅を再開しなければならないらしいので仕方がない。

そして今何をしているかと言えば

「全力で行かせてもらいます師匠！！」

「うむ。来なさいロウ君」

師匠と実戦形式の模擬戦をしていた。

もちろん師匠は全力ではない。

ハンデとして使うのは魔力弾と障壁のみ。

しかも魔力弾の威力は今の俺の物と同じくらいにしている。

まあ、それでも十分強敵なのだが。

「うおおおおおおおお！！」

先手必勝と言わんばかりに俺は魔力弾、ではなく魔力を使って大量の石を浮遊させた。

その数は千を超えている。

石が腐るほどある山の中だからこそ出来る芸当だ。

まずは数で勝負してやる！

俺の意思に従い、上空の石が四方八方から師匠に向けて打ち出された。

「まずは質より量という事かな。でも――――」

師匠は半円状の障壁、小規模な結界を張る。

当然のように石は全て弾かれ、師匠の身体に一つも届かない。

「ただの石ではこの結界を破れないよ」

「それくらい予想してますって」

俺は懐から銃を抜き師匠に向ける。

あの石はダメージを与えるのが目的ではない。

あの結界を張らせるために放ったのだ。

結界を張れば全方位の攻撃に対応できるが、それと同時に移動でき

なくなるという欠点がある。
つまり術者はその場から動けない。
そしてそれは師匠も例外ではない。
普通に撃ったところで師匠なら簡単に避けられるだろう。
故に、どうしても師匠の動きを止める必要があったのだ。
「・・・・結界を打ち抜くつもりだね。出来るかな？」
俺を試すような口調で師匠が言う。
そう、足を止めたところで師匠が張っている結界を破れなければ意味がないのだ。
だが、
「出来ますよ。じゃなきゃこんな作戦立てませんって」
今の俺なら出来るはず、いや、必ず出来る！
まずイメージするのは螺旋。
それをどこまでもどこまでも早く回転させ、イメージで高まった魔力を銃に送り込み引き金を引く。
バァン！　バァン！　バァン！

石が降り終わる瞬間、デザートイーグルが連続で咆哮し三発の魔弾が師匠めがけて飛んでいく。

そしてそれら全てが師匠の障壁をまるで紙のように貫通した。

「むっ！」

師匠はその神業めいた見切りで銃弾を避ける。

おそらくは結界に衝突した一瞬のタイムラグで見切ったのだろう。

低速度とはいえ銃弾を生身で避けるとは本当に化け物じみてるな。

しかし、

「・・・・攻撃を喰らったのは久しぶりだよ」

師匠の右腕には擦過傷が出来ていた。

流石の師匠も完全には躱せなかったようだ。

「銃弾を魔力で強化したようだが・・・・察するに貫通力に特化しているね」

「お察しの通りです。そうですね、名づけて――――――」

あの堕天使との戦いにおいて、奴の障壁を突破する事が出来れば俺はもっと簡単に勝てたはずだ。

だからこそ俺はどんな防御でも突破できる攻撃を求めた。

単純に威力の高い攻撃をすれば楽なのだが、それだと魔力がすぐに空になる。

ならばどうすればいい？

そう考えているうちに懐にしまったデザートイーグルが目に入ったのだ。

その時ピンと来た。

銃にはライフリングという弾丸に旋回運動を与える機構がある。

そう、旋回運動、つまりは回転だ。

魔力弾を高速で回転させれば貫通力が高まるのではないか？

そう考えた俺はその日から師匠に隠れて実験を繰り返した。

何回もの試行錯誤を繰り返した末に完成したその技の名は――――――

「“スパイラルショット”――――――どんな防御も打ち抜く魔弾です」

「スパイラルショットか・・・・良い技だね。銃を使っているのはイメージをより強くするためかな？」

「はい。俺にとって銃（コイツ）は一番の得物です。何かを撃ち出すならコイツを介した方がずっと強くイメージ出来る」

この技の肝はどれだけ回転数を上げられるかの一点にかかっている。
そしてその回転数はイメージの強さによって変わる。
銃弾に魔力を込めて撃ち出すのと、何も使わずに魔力だけで撃つのでは、前者の方がはるかに効率が良くイメージする事ができた。
たぶん、慣れ親しんだ物を使っているからだろう。
銃と銃弾が無ければ威力が大幅に下がるっていう欠点さえ除けば、ほぼ完ぺきな仕上がりとなっている。
「その様子だと他にも何か編み出しているように思えるのだが・・・・違うかな？」
「さあ、どうでしょう？　有るかもしれませんし、無いかもしれませんよ」
本当の所は複数ある。
スパイラルショットを編み出す時に出来た副産物ばかりだが、実戦でも有効的なはずだ。
「それでは有ると仮定して、これ以上は怪我をしたくないのでね。切り札を使わせてもらうよ」
そう言って師匠が上に手を掲げた瞬間、おびただしい数の魔方陣が上空に現れた。

・・・・・・・え？

「あの、師匠。　魔力弾しか使わないんじゃないんですか？」

「そうだよ。今から魔方陣から発射されるのは全て魔力弾だよ。ちなみに、一つの魔方陣からは毎秒十発、それが三十秒続くからね」

えっと、空に浮かんでいる魔方陣の数はざっと百は超えてるよな。仮に百と仮定して計算すると・・・・・最低でも三万発以上は来るって事じゃ・・・・・。

「・・・・・師匠、ひょっとして怪我させたから怒ってます？」

「怒ってなどいないよ。むしろ嬉しいくらいさ。教え子が成長してくれるのはね」

「嘘だ！　絶対嘘だ！　そんなの喰らったら絶対死にますよぉぉぉぉ！！」

「安心しなさい威力は抑えておくから・・・・・では行くよ“ジェノサイドサーカス”」

師匠の言葉と同時に、視界を覆い尽くさんばかりの魔力弾が俺に殺到する。

「うわあああああああああああ！！　死ぬ、死ぬ、死んじゃうよ俺！　てゆーか技の名前からして俺の事殺す気ですよね師匠ぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

即座にスーパーモードを発動した俺は死ぬ気で魔力弾から逃げ回るのだった。

師匠との模擬戦――――――――――ラスト二秒で逃げ切れなくなった俺の敗北で決着がついた。

――――――――――――――――――――

「改めて思うが君は本当に天才だよ」

ボロ雑巾のような状態で倒れている俺に向かって師匠はそう言った。

い、嫌味にしか聞こえねえ・・・・・

口を開こうと思ったがダメージとスーパーモードの副作用でうめき声すら出ない。

「別に嫌味などではないよ。僅か三週間でこれほどのレベルにたどり着くのは、天才と言う他ない」

いつものように俺の思考を読みながら、師匠は懐から小瓶を取り出した。

初日に俺が飲んだものとは違うようだが・・・・

師匠は小瓶の蓋を開け中身を俺の身体に振りかけた。

その途端、俺の怪我が煙を立てて消失していった。

な、何だこりゃ！？

俺は起き上がり体の調子を確認した。

体力、魔力はそのままだが怪我は完治している。

師匠は俺に何をしたんだ・・・・？

「フェニックスの涙は如何なる傷でも癒す力を持つ。これについては座学の時間に教えたはずだよ」

フェニックスの涙・・・・確かフェニックスには聖獣としてのものと悪魔の侯爵の地位を持つのがいるんだったよな。

で、そのフェニックスの涙はどんな傷でも癒す力があるって確かに教わった。

でも、

「それと同時に高値で取引されてるって言ってませんでしたか？それなのに・・・・」

「元々使う予定だったんだ。気にしなくてもいいよ」

元々使う予定だった？

あれ、それじゃあ・・・・

「師匠は俺を殺す気じゃなかったんですか？」

「・・・・君は私を何だと思っているんだい」

うおおおう。

ジト目で睨まれ少し竦んだ。

「この模擬戦は試験だったんだよ。君がどれほど魔術を使って戦えるかのね。結果は期待以上だった。まさか手加減していたとはいえ私の防御を打ち抜いてくるとは思わなかったよ。とりあえず今の君なら中級堕天使なら簡単に倒せるだろう」

そっか・・・・俺、そんなに強くなってたんだ。

このチートな師匠と修業ばっかりしてたからイマイチ実感が湧かないが、この人が言うならそうなのだろう。

「とはいえ、精進を忘れてはならないよ。君に教えたのはオーソドックスな魔術のみだ。他の術式についてだが、私でも教えられないわけではないがその専門家に比べればどうしても劣る。北欧魔術の使い手に一人友人がいるから後で紹介状を書いておこう。時間が出来たら行くといい」

「本当に・・・・本当にありがとうございます！」

「何、気にする事はない。三週間とはいえ、せっかく出来た弟子に死なれるのは私も嫌だからね」

俺は生涯この人への感謝を忘れる事はないだろう。

俺に戦う術を、知識を教えてくれた恩人なのだから。

「そうそう、これは餞別だ。受け取るといい」

師匠が俺に手渡してきたのは銀の指輪だった。

余計な装飾は一切無いが、何処か不思議な感じがする。

「魔力封じの指輪だよ。それを嵌めていれば魔力が一切使えない代わりに魔力を感知される事もなくなるという代物だ。認識阻害の効果もあるから嵌めている間は誰も見えないようにもなっている」

その言葉を聞き、さっそく小指に嵌めてみる。

「あ、本当に魔力が感じられなくなりましたね」

嵌めた途端、俺の魔力が感じられなくなった。

おそらく覚醒する前と変わらなくなっている。

「効果は確かなものさ。さて、魔術についてはこれで終了だ。これから最後の試験を始めよう」

・・・・・・・・・・・はい？

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「・・・・師匠、ここ何処ですか？」

「日本アルプスだよ」

「・・・・寒いっスね」

「夏とはいえ標高三千m地点だからね」

「・・・・・師匠」

「何だい？」

「俺、ここで何をするんですか？」

「ああ、簡単な事さ――――――――ここの頂上に生息するとある魔物を倒すんだ。魔力なしで」

・・・・・まいったな。今すぐ泣きたいよ俺。

いきなりこんな山に転移したと思ったら、魔力なしで魔物と戦えとかふざけてるにも程がある。

俺の今までの特訓は何だったんだよ？

「これは魔術ではなく、君の神器について知るためだよ」

「神器・・・・・・ですか」

心を読まれたのはもう気にせず、俺は師匠の言葉で納得してしまった。

俺の神器・・・・頑丈以外取り柄のない鎖は初日以降出していない。
師匠からそういう指示があったからだ。
「あれから知り合いに連絡をとって色々と調べてみたのだがね、君の神器についてある可能性が浮かび上がったのだよ」
「その可能性って？」
「確証は無いからまだ言えない。だからこそ、その確証を得るためにここに来たんだ」
この状況から考えると・・・・なるほどな。
「・・・・つまり、俺の神器を使って戦闘する事で何か分かるかもしれないって事ですか」
魔力を封じて戦うのはおそらくそのためだろう。
神器のみで戦わなければ分からないのかもしれない。
「その通り。命がけになるかもしれないが覚悟はいいかね？」
そんなの答えるまでもない。
元より命を賭けるのには慣れている。
「そんなもんとっくに出来てますよ。んじゃ、さっさとその魔物の所に行きましょうか。ちなみにその魔物って何なんですか？」

「ああ、我々の間では雪女と呼ばれている存在だよ」

・・・・・雪女？

雪女ってあの、雪山で遭難して、運命的な出会いをして、後々人間に化けて人里に下りてくるあの雪女だよな！？

最終的に嫁になるっていう、あの雪女だよな！？

スッゲー見てみたい。

何だかテンション上がってきたぞオイ。

「師匠、急いでいきましょう！　雪女が俺たちを待ってます！！」

俺は全速力で山を駆け上がって行った

待ってろ雪女！

今すぐその姿を拝みに行ってやらあ！！

「ま、待つんだロウ君！　雪女とは世間で言われているようなものじゃ――――――」

師匠が何か言っていたが無視して俺は上り続けた。

後に、この時の行動を俺は死ぬほど後悔するとも知らずに。

―――――――――――――――――――――

「ううっ、こんなのあんまりすぎるだろ・・・・・・！！」

「・・・・ロウ君、泣いてはいけないよ、泣いては」

師匠がｏｒｚ状態の俺の背中を撫でながら慰めの言葉をかけてくれる。

何故こんな事になったかといえば、

「あんなの雪女じゃねえよ！　白くて大きいゴリラじゃねえかあああああああああ！！」

頂上にたどり着いた時に俺が見たのは、薄い着物を着た妖艶な美女ではなく、ぶっとい両腕で分厚い胸板を叩きドラミングをしているゴリラだったのだ。

ふざけんな！

雪女があんな毛むくじゃらでドラミングなんてするわけねぇだろ！

ドラミングなんてゴリラのする外敵への威嚇行為だぞ！

どっからどう見てもゴリラとしか言いようがねぇ！

「ロウ君、君に追い打ちをかける事になるけど言わせてもらおう。

――――――世間で言われているような雪女は存在しないんだ。我々にとって雪女とはイエティの事なんだよ」

師匠の言葉によって俺の中の雪女への幻想は完全にぶち殺された。
現実は小説よりも奇なりと言うが、いくらなんでもこれは無いだろう。

「・・・・許さねえ・・・・許さねえぞこのゴリラがあああああああ！！」

テメエは俺の、いや、男たちの夢を粉々に砕いたんだ！

色々考えてたんだぞ！

一緒に写真撮ったり、一緒にお茶飲んだり、一緒にカラオケで歌ったりするのを夢見てたんだ！

それを、それをよくも・・・・・・・！！

「覚悟しろよクソゴリラ！！　テメエの犯した罪は重いぞォォォォォォ！！」

怒りのあまり、俺はゴリラに向かって突貫した。

向こうも俺の存在に気づき戦闘態勢に入る。

ぜっったいにぶっ潰す！！

それだけを考えて右腕に神器を出し、デザートを左手に持つ。

まず腕から鎖を四本走らせ、ゴリラの四肢に絡みつける。

そのまま力一杯引っ張って体勢を崩そうとするが、

「んなッ！」

ビクともしない。

とんでもない膂力だ。

そもそも冷静に考えれば人間が力比べでこんな化け物に勝てるはずがない。

怒りのあまり思考が短絡的になりすぎてたか。

「ホキョオオオオオオオオオオッッ！」

「うおおおおおおおッッ！！」

ゴリラは咆哮をあげながら左腕一本で鎖を掴み俺を引き寄せた。

力負けした俺は空中に放り出され身動きが取れなくなる。

し、しまった！

ゴリラの方を見てみれば空いた右腕でパンチを放とうとしている。

あんなの喰らったら死亡確定だっつーの！

デザートの照準をゴリラの額に合わせ一発撃つ。

が、

「ウホォォォォォ！！」

全く意に介さず、俺の胴体めがけて右パンチを放ってきた。

「ゴフッ！」

咄嗟に残る六本の鎖を絡み合わせ盾にしたが、アバラの折れる音が響きわたる。

そのまま数m吹っ飛ばされた俺は岩場に体を叩きつけられ、そこで意識が暗転した。

――――――――――――――――――

「・・・・ここは」

気が付けば俺はあの薄暗い部屋にいた。

いつもは寝ている時にここに来ている。

つまり、

「・・・・気絶しちまったのか」

あのゴリラの一撃はそれほどのものだったという事だ。

一応防御には成功したから、少なくとも死んではいないはずだ。

ならば早いとこ起きねえとな。

そう思いつつ周りの拷問具を見渡す。

これらの拷問器具はかなりの年代物ばかりだ。

おそらく中世頃に使用されていたものだろう。

歴史の教科書で幾つか見た事がある。

この時代の拷問具は趣味が悪いとしか言いようがない。

見かけからしておぞましいとしか言えないし・・・・・

その中で一つ、目に留まったものがあった。

俺はそれを手に取りじっくりと見てみる。

「・・・・間違いねえ。この鎖、俺が使ってたやつだ」

それは十本にまとめられた鎖。

見覚えがありすぎる。

修業初日、そしてさっきまで使っていた鎖そのものだ。

「待てよ・・・・ひょっとして！」

俺の脳裏にある考えがよぎる。

俺が今まで神器だと思っていたものは神器ではなくその一部だとしたら？

そして、この部屋にあるもの全てがそうだとしたら？

そう思っているうちにいつものように黒い靄が現れ始める。

いつもはこいつらを粉々に打ち砕いて夢から覚める。

でも駄目だ。

今俺がしなければならないのはこいつらを振り払うんじゃない。

こいつらをこの部屋から追っ払わなければならないんだ。

ここで俺は直感した。

今まで鎖しか出せなかったのはこいつらがこの部屋にいたせいであると。

こいつらのせいで神器の機能が阻害されていたという事を。

「おいテメエら」

いつも以上に気合を入れて言葉を紡ぐ。

「勝手に俺の物弄り回しやがって、調子こいてんじゃねえぞこの〇〇どもがあああああああああ！！　ブツブツブツブツ愚痴るしか能のねえ奴が俺の邪魔をするんじゃねえ！！　とっととここ

から消え失せろ！　ここは、こいつは、俺の物なんだよおおおおおおおおおおおおおおお！！」

俺はあらん限りの力で自分の思い、感情を黒い靄にぶつける。

するとたちまち靄は消えていき、暗かった部屋が明るくなり、血の匂いも消えた。

あいつらは消滅したわけではない。

…奥の方に引っ込んだだけだというのは何となく分かる。

しかし、“機能”自体は完全に掌握する事が出来た。

「さ～て、あのゴリラに一発、ぶちかましてくるとするか」

そして俺の意識が覚醒する。

――――――――――――――――――――――――――――

「――――――ッ！」

あの部屋――――――神器の内部から帰還した俺は体のダメージを無視し立ち上がった。

ゴリラは右腕を振り切った状態で、立ち上がった俺を驚いたように

凝視している。

即座に状況を把握、

気絶していた時間――――――ゴリラの状態から推測すると約二〜三秒。

体の状態――――――――――アバラが数本骨折。

戦闘可能時間――――――およそ三分。それ以上は折れた肋骨が肺に突き刺さる可能性大。

武装――――――――デザートイーグル一丁、残弾七発。

神器――――――制限解除。同時展開できるのは今のところ三個。

精神状態――――――最高潮。

状況把握が終わるや否や、ゴリラに向けて疾走する。

それを見たゴリラも俺の方に向かって突進しながら両腕を大きく振りかぶる。

「かかったなゴリラさんよ」

俺は急停止しゴリラを迎え撃つ体勢に移行する。

俺が動いたのはフェイントだ。

こいつに自分から突っ込んでこさせるためのな。

意標を突かれたゴリラは何も無い空間で空振りバランスを崩す。
その隙を逃す俺じゃない。
「とりあえず喰らいな」
俺は背後から新たな拷問具――――――馬鹿でかい車輪を創り出し
真っ直ぐ飛ばす。
当然避けられるはずもなく、車輪に衝突したゴリラは後ろへ大きく
吹っ飛んだ。
「ついでだ、受け取れよ！」
そのまま追い打ちをかけるように四発発砲する。
それら全てが胴体部分に命中した。
さっきは全く効かなかったが今回は違うぜ。
ジュウウウウウウウウ！！
「ホキョオオオオオオ！！」
弾丸が当たった場所から煙が上がりゴリラが苦しみだす。
「・・・・麻痺毒とはいえ、ちっとグロイか」
弾丸に神器の力――――――今回は毒液――――――を乗せて撃ったの

だが中々効果的らしい。

俺は今、自分の神器の能力について完全に把握している。

俺の神器の能力とは即ち“拷問具の創造”だ。

あの部屋にあった数々の拷問具、それを俺は創り出す事が出来る。

同じものは同時に創れない、一度に出せる数は三個まで、といった欠点があるが応用性がかなり高い。

今のように直接創り出すのではなく、弾丸に力を乗せるなんて事も出来るし、何より俺みたいな頭を使って戦うタイプの人間にとっては戦術の幅が大きく広がるという利点がある。

まさしく俺にピッタリな神器であるのは間違いない。

今まで俺が鎖しか使えなかったのは、あの黒い靄――――怨念が神器の機能を阻害していたからだ。

何故この神器にそれほどの怨念が宿っているのかは分からないが、俺がそれを押し込めた事によって本来の機能を取り戻し、全ての拷問具が使えるようになったのだ。

「ウホォォォォォォ！！」

雄たけびを上げ、ふらつきながらもゴリラが立ち上がってきた。

マジかよ。

麻痺毒を喰らってもまだ動けるのか。

「いいぜ。次で最後だゴリラ、いや、イエティ！！」

こいつの耐久力を考えるとゼロ距離で撃ちこむしかない。

俺は車輪を自分の前に戻し、そのまま突進する。

おそらくこの車輪は止められる。

さっき吹っ飛ばせたのは体勢が崩れていたからだ。

だが、それでも一瞬は拮抗状態に入る筈だ。

その隙を狙い撃つ。

そのつもりだったのだが、

「――――――――ッツ！」

イエティが大きく口を開いたのを見て、修業で鍛えた危機察知能力が警報を鳴らした。

その直後、

ブフゥゥゥゥゥゥッッッ！

イエティの口から吹雪が吹き出てきた。

それに直撃した車輪は凍りつき罅が入る。

此処に来て冷凍ブレスかよ！

車輪が砕けた瞬間、俺は氷像に早変わりするだろう。

この状況で俺が出来る事は――――――

「うおおおおおおおおっっ！」

スーパーモードを発動し、車輪を踏み台にして前に跳躍した。

直後に車輪が砕け散るが、今の俺は上空、吹雪の範囲外にいる。

チャンスは今しかない！

デザートの照準をイエティの額に合わせ今度こそ、

「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ（さよならだ）．またいつか戦おうぜ」

撃ち出された弾丸がイエティの意識を刈り取った。

――――――――――――――――

「血の伯爵夫人（エリザベート・バートリー）、呪われた神器とも呼ばれる最悪の代物。それが君に宿る神器の名前だ」

治療を受けながら、師匠は俺の神器についての説明を始めた。

・・・・ずいぶんと嫌な前評判だな。

「最初はありえないと思っていたが、君が拷問具を創り出すのを見て確証に至った。・・・・君にはつくづく驚かされる」

「・・・・そんなに変なんですか俺？」

「変を通り越して異常だよ。それの歴代の所有者は全員発狂して死んでいる。神器を発現した場合は早くて一日、遅くて三日だ」

「・・・・マジですか」

そんなに危ないものだったのかこれって。

「マジだ。今でも正気を保てている事について心当たりはあるかい？」

とりあえず毎日見ていた夢について話した。

そして戦闘中に怨念を奥の方に追いやった事も。

「・・・・神器に宿っていた怨念を全て深奥の部分に押し込んだというのかい？　出鱈目にもほどがある」

師匠は驚愕の表情で俺を見ている。

そこまで凄い事をやったつもりはないんだがな。

「ロウ君、神器の本体を出してみなさい」

「・・・・分かりました」

鎖や車輪はあくまで一部でしかない。

そしてそれらを纏める本体を手の上に呼び出す。

見かけは本、だが禍々しいオーラを放ち、鎖によって何重にも縛られていた。

何というか、如何にも危険という感じがするな。

「血の伯爵夫人（エリザベート・バートリー）というのはかつての所有者の名前からとった通称にすぎない。本来は“空想創造（イメージメーカー）”と呼ばれる、無機物限定で書き記した物を創り出すという神滅具に匹敵する神器だったんだ。だが今から四百年ほど前の所有者、ハンガリー王国の貴族エリザベート・バートリーがこの神器を狂わせたんだ」

「その人、何したんですか？」

「彼女は神器を使って多くの拷問具を創り上げた。それらを使って拷問、そして死に至らしめた数は六百人以上だ。通常、神器をどれだけ使って人を殺しても、所有者以外の思念が残る事は無い。だが彼女は殺人狂であると同時に超一流の黒魔術師でもあったんだよ」

「黒魔術師ってことは・・・・まさか」

「そう、彼女は何を考えたのか黒魔術を使って神器に殺した人間の怨念を封じ込めたのさ。更には死の間際、彼女は自らの魂を神器に封印したんだ。・・・・その影響で神器は彼女の代で追記不能になり、それ以降の所有者は取り込まれた怨念によって精神を蝕まれるようになったんだ」

・・・・まさしく呪われた神器だな。

しかし、自分の魂を封印した・・・・・か。

「ロウ君、今のうちに言わせてもらうが神器の深奥の部分に潜ろうとしたら駄目だよ。うかつに刺激したら何があるか分からないからね」

「わ、分かってますって」

「・・・・まあ、とりあえずこれでやる事は全て終わったし、これにて本当に修業は終了だ。良く頑張ったね」

師匠は微笑みながら俺に封筒を二つ渡す。

「私の友人への紹介状だ。これを見せれば力になってくれるはずだよ」

その言葉と同時に転移魔方陣が俺の足元に現れる。

転移先はおそらく家の前だろう。

「師匠、本当にお世話になりました！！」

俺は師匠に深々と頭を下げ、感謝の言葉を述べた。

「うむ、またいつか会おうロウ君！」

そうして俺は師匠と別れたのだった。

いつか、再開する約束を交わして――――。

ーーーーーーーーーーーー―――

家に帰ってからまず最初にイッセーの部屋に訪れた。

そこにいたのは、

「お・・・・・・・ぱ・・」

机につっぷし、生気をまるで感じられないイッセーだった。

かろうじておっぱいと言おうとしているから死んではいないだろう。

俺はあらかじめ用意してあったハリセンを握りしめ、

「正気に戻れイッセェェェェェェ！！」

パアンパアンパアンパアンパアンパアン！！

正気に戻るまで何回も叩きつづけたのだった。

こうして俺たちの中学最後の夏休みは終わった。

Ｌｉｆｅ．４　夏休み、終わりました（後書き）

今回は修業終了とロウの神器の説明でしたが色々と難産でした。

今回で中学三年生編は終了です。

次回から高校進学前の春休み編に入るか閑話が入ります

閑話．　合格発表日の出来事（前書き）

閑話です。

とりあえずタグのイッセー強化という意味が分かります。

閑話・　合格発表日の出来事

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！　どうしてあんなむさ苦しい連中に追われなくちゃならないんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「どれもこれも松田と元浜の馬鹿のせいだ！　あいつら自分たちだけ逃げやがって！　この恨み、ぜってえ忘れねぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

俺とイッセーはそんな雄たけびを上げながら十人以上の男たちに追われていた。

何があってこんな状況に陥ったか。

それは今から五分前に遡る――――――――――――。

――――――――――――――――――――

「「「カンパーイ！！」」」

二月中旬、冬も終わりに近づいてきた時期にファミレスで俺とイッセー、そして松田と元浜の四人で祝勝会をしていた。

何の祝勝会かと言えばもちろん志望校合格の祝勝会だ。

「しっかし、この四人で駒王学園に通う事になるとは正直夢にも思わなかったぞ」

「まったくだ。ロウはともかく、馬鹿のイッセーが合格するとは。これもスケベ根性が成せる業か」

「わざわざ俺が勉強を教えたんだ。どんな馬鹿でも合格してもらわなきゃ困る」

「お前らひどい言い様だな！　俺だって死ぬほど頑張ったんだぞ！」

ちなみに俺も駒王学園に進学する事にした。

もっと上のレベルの学校に行く事も出来たが、神曰く、高校の時に物語が始まると言っていたので同じ学校の方が都合がいいと思ったのだ。

まあ、知らなかったとしても同じ学校に行っていたと思うが。

それと駒王学園について色々と調べてみたのだが、やはりというか只の学校ではなく悪魔と深い関わりがある学校だった。

悪魔や悪魔と関わりがある者が通っており、学園そのものが元７２柱の一つ、グレモリー家の次期当主であるリアス・グレモリーの領土らしい。

入学してからは出来るだけ一般の生徒のふりをする方針でいるがどうなるかは分からないな。

ま、今はそんな事どうでもいいか。

「死ぬほど頑張ったってお前、勉強してる時の記憶あるのか？」

「・・・・無い。けど頑張った筈なんだ！だって手にペンだこ出来てんだもん！　それだけ勉強したって事だろ！」

自分の手を突き出しながらイッセーが叫ぶ。

夏休みの地獄の勉強会でイッセーは著しくレベルアップした。

まあ、その代償としてこいつの中三の夏休みは空白の出来事となってしまったが。

本人にしてみれば夏休み初日のはずがいきなり最終日になっていたのだから、ちょっとした浦島太郎気分だろう。

しかしその甲斐あって、夏休み明けテストでは全科目で高得点を取った。

・・・・カンニングを疑われ後日再テストを受けさせられていたが。

「まあ、何はともあれ全員合格したんだ。この腐れ縁もまだ続くという事だな」

「元浜の言う通りだ。そして、俺らには女の子にモテまくるという夢のような学園生活が始まるんだ！」

「そうだ・・・・そうだよ！　男女比率は三対七だっていうし、それだけ女子がいれば彼女の一人や二人、簡単に出来るよな！」

グフフフといやらしい声をあげる三人。

変態だな。

どこからどう見ても変態にしか見えない。

周りの客もドン引きした目でこいつらを見てるし。

・・・・とりあえず現実を教えてやるか。

「お前らじゃ無理に決まってるだろ。今のうちに諦めた方が傷が浅くて済むぞ」

俺の言葉で三人が怒りの表情で俺を見てくる。

そんな怖い顔すんなよ。

「ロウ、お前何を根拠に」

「賭けてもいい。モテるのは俺みたいな一部のイケメンだけで、お前らなんて廊下に落ちてるゴミクズ程度の認識しかもってもらえないって」

イッセーの言葉を遮り事実を言う。

だがそれでもこいつらは食い下がってきた。

「ロウ、お前自分がモテるからって調子に乗るんじゃない。・・・・確かにイッセーと松田はそうかもしれないが俺は違うはずだ」

「元浜、女子の体型を数値化できる時点でお前は立派な変態だよ」

「そんなはずがない、俺の目的は空想なんかじゃ終わらないんだぁぁぁぁぁ！！」

「一年後同じセリフ言ってみろイッセー。あとうるさいから小声で叫べ」

「高校在学中に大人の階段を上る事が出来ないって言うのかよ！？」

「そのまま魔法使いになってるだろうな。一生妄想してろ松田」

俺の痛烈な一言によって変態三人組が項垂れる。

これでいい。

女子に直接言われるよりもダチの俺がはっきりと言ってやった方が傷は浅くて済む。

そう思っていると元浜が呟いた。

「・・・・・たとえモテなくても、お前のようなヘタレよりはマシな筈だ」

・・・・・・・・あ？

「・・・・ヘタレってどういう事だよオイ？」

「ふっ・・・・知らないと思ったのかロウ。この間のバレンタイン、別のクラスの女の子に告白されていただろう」

「なっ――――――――！」

何で知ってるんだコイツ！？

「どういう事だ元浜？　ロウが告白されていただと！？」

「ロウゥゥゥゥゥ！！　お前、また告白されたのかよ畜生ォォォォォォォォ！！」

「落ち着け二人とも。　それでだ、嫉妬のあまりその光景を血涙を流しながら見ていたのだが、いつものようにこいつは断った。ここまでは、まあ何とか我慢出来た。しかし！」

元浜が一端区切る。

間違いない、こいつあの時の光景を全部見てたんだ！

何とか止めなくては――――――！

元浜の顔面にパンチを放ち気絶させようとする。

しかし、

「――――――ッ！　イッセェェェェェェ！！」

俺の拳はイッセーの手に掴まれビクともしない。

クソッ！　相変わらずこの手の話が絡むとあり得ない力発揮しやがって。

「元浜、続きを頼む！」

「その後、その女の子はこう言った。『思いが届かないとしても、一度だけでいいから抱いてくれませんか？』とな」

「「何ぃ！！」」

「嫉妬で頭がどうにかしそうだったが、俺はお前がどうするのか最後まで見ようと思った。だが、お前はその問いに答える事なく――――――恥ずかしさのあまり気絶してしまった」

ぬおおおおおおおおおおおおおお！！　言うんじゃねぇええ！！

「・・・・そう言えば、ロウって昔からエロ本とかＤＶＤは見ても、実際にやりたいとか一言も言った覚えが無いな」

「なるほど、まさしくヘタレだな」

イッセーと松田は妙に勝ち誇った顔をして俺を見る。

悪いか？

そんなに悪いかよ！？

見るんじゃなくて実際にやる機会が来ると昔から、前世から頭がパンクしちまうんだよ！！

それで何度童貞卒業のチャンスを逃した事か・・・・・・！

「モテなくてエッチな事が出来ない俺らと、モテても肝心な所で一歩踏み出せないお前、どっちも同じだよ」

「お、同じじゃねえ、本気で好みのタイプとやる機会が来たらやるぞ！！」

「そのタイプってどんなのだよ？　イッセー、知ってるか？」

「確か・・・・同じくらいの歳で仕事時とプライベート時のギャップが激しい銀髪クールビューティーとか、栗毛でツインテールの天真爛漫な幼馴染タイプの女の子、だったよな」

「そんなのがいる訳ない。――――――――つまりお前は一生童貞という事だ！！」

元浜が俺を指さし高らかに宣言する。

ちなみに、この時点で俺たちの周りに客はいなくなっている。

店の人もさっきから俺たちを見ているので追い出されるのも時間の問題か。

クールだ、クールになれ薊屋狼士。

ここでキレても状況が悪化するだけだ。

大人の対応をするんだ。

俺はこの場を収めようと口を開いた瞬間、

「やめてください！」

女の子の声が響き渡った。

言わせて貰うが俺たちに向けられたものではない。

声のした方を向くと別の中学の、おそらく二年生程の女の子が男二人に絡まれていた。

おそらくは悪質なナンパだろう。

・・・・止めに行くか。

そう思い席を立った瞬間、

「やめろよあんた達。女の子が困っているだろう」

「痛い目に合わないうちにとっとと失せろ」

松田と元浜が男たちの目の前に立っていた。

ちょっと待て、気づかなかったぞ！

イッセーの方も驚いた顔をしている。

あいつら何時の間に瞬間移動なんて覚えやがった。

俺はあいつらの下心の力に感心しながら、とりあえず傍観を決め込

むことにする。

元浜はともかく松田の運動能力は高いので一対二でも勝てるだろう。

イッセーも同じ判断をしたのか席に座ったままだ。

しかし、イッセーが何もしないとは珍しい事もあるもんだ。

女の子のアピールするチャンスだというのに。

「イッセー、何で行かないんだ？」

「いや、何ていうか嫌な予感がしねぇか？　ああいう奴らがたった二人なんてさ」

・・・・確かにそうだ。

あの手の人間が二人しかいないというのは違和感がある。

たぶんトイレにあと一人か二人いるはずだ。

そして俺の予想は的中した。

あいつらが言い合いをしているうちにトイレから仲間が出てくる。

その数、十人。

・・・・トイレに集団で入るのは女の子の特権だと思ってたよ。

「やばくね？」

「やばいな」

あっという間に囲まれたぞあいつら。

しかも女の子たちは逃げちゃってるし踏んだり蹴ったりだ。

さて、助けに行くべきか行かないべきか・・・・・・・・

よし、決めた。

「イッセー、帰るぞ。あいつらは一回痛い目にあった方がいい」

「・・・・・怒ってるよな？　絶対怒ってるよな？」

ハッハッハ、何言ってるんだイッセー。

俺は怒ってなんかいないぞ。

そしてそのままこっそり出口の方まで歩いて行ったが、

「「あいつらにやれって言われました！！」」

松田と元浜の声が響き渡った。

ギ、ギ、ギと音を立てながら振り返ると、馬鹿二人が俺とイッセーを指さしていた。

「松田ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　元浜ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その叫びと共に、俺たちの追いかけっこが始まったのだった。

――――――――――――――――――――――――

「イッセェェェ

あっちは十人以上、こっちは二人。

だが、

「イッセー、久々の喧嘩だが鈍ってないよな？」

「そっちこそ。俺はいつでもいけるぞ」

この程度の奴らに負ける訳ない。

一年前はそれこそ頭にヤのつく家業の人たちに喧嘩売ったり、プロの傭兵とやり合ったりと命がけの戦いを潜り抜けてきた。

特に俺は夏休み中の修業でパワーアップしている。

負ける要素は微塵もない。

「んじゃ、半分づつやるぞ。俺は右側な」

そう言って俺たちは男達めがけて駆け出した

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ　イッセー

「オラァァァァァ！！」

俺は正面にいた男を飛び蹴りで吹っ飛ばして、一端距離を取る。

あまり一人に集中していると他の奴らの攻撃をもらっちまうからな！

俺が引き受けた左側の六人はどいつもこいつも素人丸出しだ。

構えはなってないし連携もバラバラ。

しばらく喧嘩してなかったが腕も落ちてないみたいだし結構余裕で終わりそうだ。

ヒュッ！

俺の背後から何かがくる音。

「おっと！」

これを屈んで避ける。

俺の頭の上を蹴りが過ぎ去っていく。

後ろにいた奴の攻撃だ！

蹴りを放って動けなくなっているところに体重を乗せたパンチを放つ。

ドッ！

俺のパンチで後ろにいた男は吹っ飛ぶ。

今の感触からしてしばらくは立ち上がれないだろう。

そしてそのまま上半身を回して近くの男に裏拳を当てる！
そのまま男は崩れ落ちた。
これで残り四人！
「ダッ！」
更に機敏なステップで距離を詰め二人の男の後頭部に手刀を叩き込む。
同じように倒れ込んだ二人はおそらく脳震盪を起し動けなくなっている筈だ。
これであと二人！
ここにきて男たちの目つきが変わった。
懐からナイフを取り出し同時に切りかかってくる！
「よっ！　ほっ！」
だがこっちもなっていない。
むしろ二人がかりのせいで動きが制限されている。
だから、
「シッ！」

柄の部分を手で叩きそれぞれのナイフを弾き飛ばす。
そしてそのまま！
「うらぁっ！」
後ろ回し蹴りを放ち、二人ごと蹴り抜いた！
・・・・終わったな。
そう思っていると、
「そっちも終わったかイッセー？」
俺の親友も終わったという声が聞こえてきたんだ。

ーーー

当然、俺も許す気はない。

とりあえずあいつらのホモ疑惑でも流しといてやるか。

なに、あと一か月くらいで卒業だし別に構わんだろう。

ま、今はそれよりも、

「今日はさっさと家に帰って寝るか」

「そうだな。今日はもう疲れたし、早めに帰らないと母さんに怒られるしな」

そうして俺たちは家に帰っていったのだった。

後日、卒業間際になってホモ疑惑の流れた二人の男子生徒が泣きながら誤解を解こうとする姿が目撃された。

閑話.　合格発表日の出来事（後書き）

ちょっとイッセーサイドで書いてみましたがやはり難しいです。
あと一回閑話を書いてから春休み編に入ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8168x/

ハイスクールＤ×Ｄ　～赤龍帝の幼馴染は転生者～

2011年10月29日02時16分発行